

第3部

特集・寄稿



(毎日新聞社提供)

甲府一高 校歌・応援歌・その他歌の歴史

教諭 依 田 道 彦

はじめに

本校には120年の歴史の中で、少くとも2つの校歌、6つの応援歌、その他寄宿舎寮歌、創立記念歌、生徒会歌、強行遠足の歌、学生歌等合わせると20曲近くの歌がある。創立当初も何も無かったとは思えないので、通算すれば多分30曲ぐらいいはあったろう。これらの中には作者や年代が不明なもの、楽譜の無いものも多く、書類で見当たらず、当時の生存者もいなくなると究明不可能な曲もある。今回、120周年の節目に精力的に調査して記録に残そうとしたが、自信があった訳ではないので、過去からの分散している歌の資料をひとつにまとめておくだけでも価値はあると考え、可能なら歴史も加えようと思って始めたことである。私の個人的理由もあって、今、切羽詰まって不明なまゝ解明できない曲が多く残るのは誠に残念であり、折角紙面を提供していただきながら申し訳なく思う。また、一度文字で残すと、後に訂正することが困難なので、不正確な情報は載せない方がよいとも思っている。現在、存在の確認できる歌は下記18曲である。

- | | |
|------------------|----------------------|
| 1 山梨縣立甲府中學校校歌 | 10 甲府中學校創立四十周年記念歌 |
| 2 山梨縣立甲府第一高等學校校歌 | 11 甲府中學校創立五十周年記念歌 |
| 3 応援歌「鶴城に」 | 12 生徒会歌 |
| 4 応援歌「起て起て起て健男兒」 | 13 生徒会讃歌 |
| 5 応援歌「希望の光」 | 14 強行遠足の歌「信濃路はるかに」 |
| 6 応援歌「起て撃て勝て」 | 15 強行遠足の歌「歩みをいざ」 |
| 7 応援歌「お御崎さん」 | 16 愛唱歌「太鼓橋（擬寶珠）」 |
| 8 応援歌「常勝一高」 | 17 愛唱歌「ツーライン」 |
| 9 甲府中學校寄宿舎寮歌 | 18 愛唱歌「俺は一高の伊達男（仮称）」 |

曲 別 解 説

山梨縣立甲府中學校校歌（三井甲之作詞、東京高等音樂學院〔榊原 直〕作曲）

昭和3年2月20日制定。作詞者三井甲之氏は明治16年(1883年)に松島村（現、敷島町）に生まれ、甲府中学校2年修了後、私立京華中学校へ転校し、東京帝大へ進み、「馬酔木」などの同人となり、歌人、後に国家主義的思想家として知られるようになった。1939年、敷島村長に就任。1953年に他界した。本名は甲之助。

この校歌が作られた昭和3年前後は金融恐慌や労働運動や山東出兵など激動の時代であり、満州事変前後の軍国化が色濃くなる時期であった。大正12年に甲府中学に赴任した第10代江口俊博校長は、「手のひら療治」の著者三井甲之氏と親交を持つようになった。二人は昭和5年に共著「手のひら療治入門」を出版している。本校出身で、全国的に高名な歌人と校長が親密であれば、校歌の作詞者とし

ての条件は充分あったと言える。

東京高等音楽学院作曲とあるのは、当時文部省唱歌が作者を伏せたのに倣っている。江口校長が東京から甲府中学へ単身赴任した時、市川大門出身の甲中生一瀬幸吉氏（昭和4年甲府中学卒）の仮住まいに同居した関係から、一瀬氏が親の反対を押し切って東京高等音楽学院（現、国立音楽大学）へ行きたい事を江口校長が後押ししてくれたのだった。「私の友達が國立で音楽學院をやっている。渡邊敢といふのだが。ここへ行きたまへ。」と勧めてくれたという。それで一瀬氏は、念願叶って東京高等音楽学院に入学することが出来た。

「私が豫科1年の頃、同級生の畑野君が（ハーモニカ部の指揮者）篠原先生と國立に見え、新校歌を（練習に來た）音楽學院のピアノ教授の榊原直先生が作曲された。甲府中學校校歌はこんな風な段階をふんで生れた。」と一瀬氏は江口俊博先生追悼集に書いている。一瀬氏は警察音楽隊指揮者、国立音大山梨県支部長等を務めた。一瀬氏に電話で確認したところ、江口校長は学院長と東大で同級だったから、その関係で校歌作曲を依頼したのだろうという。学院長の名前は思い出していただけなかった。国立音楽大学へ問い合わせたところ、当時の学院長は渡邊敢氏で、大正15年から昭和5年まで務めた初代学院長であった。作曲者榊原氏は昭和34年まで存命であった。

儀式用の校歌と別に、同じ歌詞による行進曲も同時に作曲された。発表後最初に印刷されたと思われる創立五十周年記念誌の中にある2曲の楽譜が最も信頼できるものであろう。この校歌は、現在の校歌が制定されるまでの20年間歌われた。

（楽譜は「百年のあゆみ」参照）

- 一、我等は日本に生れたり 神の御代より一系の
皇統戴く我國に 生れしことのうれしさよ
皇國の榮えは天地と 共に窮りなかるべし
- 二、大和島根に山めぐる 甲斐の國あり水清き
郷土の歴史顧みよ 我等の務め輕からず
見よや南に富士が嶺は 皇國の鎮めと聳えたり
- 三、大海原の揺りやまぬ 波をも風をも凌ぎつつ
護れ皇國を諸共に 國民舉りて國のため
撓まず萎縮まず辟易がず 進むぞ大和ごろなる

昭和3年以前の約50年間には別の校歌が1～2曲あった筈であるが、現在不明である。昭和2年卒業の清水八束氏は「私どもが在校した大正末期當時は校歌が制定してなかった。他校との對抗試合のときなどはもっぱら應援歌で、3種類か4種類ほどあったと思ふ」と百周年記念誌に書いている。

甲府中学の分校から始まり、明治34年に山梨県第二中学校として正式に出発する日川高校には、創立当時から校歌と呼ぶ曲が存在し、やがて創立記念式典歌が校歌のように歌われたことから、学校に校歌が存在しないことは考えにくい。

上記の校歌は終戦後は歌うことも出来ず、新校歌が生まれるまでの3年近くは校歌の無い時代があったと思われるが、儀式やスポーツの応援時にはどうしていたのだろうか。昭和23年から新制高等学校になり、三年制で入学年齢が3歳上がり、25年には男女共学になる時代背景にあった。昭和23年5月20日付け甲府一高新聞発足記念号にある論説「我等の校歌をつくれ」と題する高校2年生名執安雄氏の全文を少し長いが紹介しておく。現在の高校生に読ませたい内容である。

「歌を忘れたカナリヤは象牙の舟に何とやらと、校歌を忘れたこの甲府一高では一體何時になったら新校歌が歌はれることであらうか。名称や帽章は一應高校としての形態を整へて來たが。しかし大戦前まで歌はれて終戦後我々の間から消へ去った校歌は未だ我々の胸に歸って來ないのである。これは悲しむべき大きな缺陷であると云はねばならない。「我々の歌をつくれ」かう叫ぶ學生がもし一人もないとするならばそれは少くとも情熱を有する青年の集團ではあり得ない。我々は、巷に溢れる流行歌を以て真に自己を満足させて居られるほど、我々の藝術的良心は低級ではないつもりである。校歌はその言葉の如く全體を象徴するが、これは決して儀式的形式的なものではない筈である。感受性の鋭い若い心に音樂の與へる影響の如何に偉大であるかを思ふ時、我々はこの問題の決して第二義的でないことを知るのである。我々は組織の中に生活し、組織の秩序を維持することに依つて自己を形成して行くのであるが、このチーム・ワークの中に真に觸れ合ふものを持つてゐるだけの人はその全體の中にのみある純粹な嚴肅な喜びを感じとることが出来るのである。校歌はかう云ふ全體意識の典型的表現である。我々はスポーツに於ける如きチーム・ワークの秩序と感激を深い豊富な音樂的世界を通じてともすれば無感覺になりがちな自分等の意識の中に迎へ入れたいのである。我々は校歌を欲する。我々は新時代に適した校歌の作製を校歌改訂委員會に對して速やかに全校生徒の魂が合唱する、永續性を持った校歌を制定することを希求するものである。」

(元本校教諭浅川保、昭和31年卒樋泉明両氏提供)

山梨縣立甲府第一高等學校校歌（上條 馨作詞、小松 清作曲）（昭和23年）

昭和23年4月、学制改革により山梨縣立甲府第一高等学校と改称された。校歌改編について職員會議で議論の結果、近藤兵庫校長は旧制中学校の校歌はあまりに國家主義的すぎると判断して改めることにした。校歌改訂委員會を設け、在校生、職員、卒業生から歌詞を募集し、応募された22篇の歌詞を委員會が8篇に絞った上で、俳人飯田蛇笏氏が委員長で審査した結果、職員の上條馨氏（当時28歳）の作品が抜群に格調高く激賞され、最優秀と推奨された。作曲は旧制七年制の東京高等學校（現、東京大学）の音樂担当の小松清教授に委嘱し、昭和23年10月22日（創立68周年記念日の前日）新校歌の發表会で披露された。ソプラノ浅野千鶴子、ピアノ安倍和子両氏を招いて校歌發表と記念演奏会も行われた。席上、作詞者の挨拶で上條馨氏は「自分の心を清く氣高く、また雄々しく保たなければ到底立派な作品はできないと考へ、夏休みに南アルプスの鳳凰山や北アルプスの縦走を通して精神を統一して作詞した。1ヶ月間思考して練ったがなかなか纏まらなかったところ、或る晩着想して一氣に書き上げた。その後も修正を加へてやっと

出来上がった（要約）」という。（上條馨氏の著書「甲州風物誌」参照）

作曲者については、第14代近藤兵庫校長が、前任校、旧制東京高等學校（七年制）の音楽科小松清教授と懇意だったことから、校歌の作曲を依頼したと話されたことを有泉貞夫氏（昭和26年卒）は記憶しているという。

（楽譜は「百年のあゆみ」参照）

一. 甲斐の國 み中に建ちて 古へゆ 雄心つたへ
新しき 世の鑑とし 勉めてむ この學びやに

二. 日に新た また日に新た いや高き のぞみをもちて
真なる 理きはめ 勵みなむ 若人われら

三. 聳えたつ 芙蓉のたかね 清きかな 甲斐の山川
もろともに 玉と磨きて 贊くべし 天地の化育

上條氏の著書「甲州風物誌」全体は新漢字で印刷されているが、原文は本漢字と旧仮名遣いで書かれたことを和子夫人に確認できたので、原文の通り旧仮名、旧漢字で記した。

また、作詞者は「甲州風物誌」に歌詞の解釈も記しているので、正しく理解されるよう、ここに転記しておく。（抜粋）

一番、この甲斐の國の中心に位してゐる我が校は、その創立の昔から、雄壯剛健の氣風をうけつたへて、今この新しい世に際會しては、この世を照し正すかかみともなるやう大いに奮勵努力しやう、この榮ある學舎において。

二番、日に新た又日に新たといふのは、學徳を日々に新たに進め----、高い理想と希望とをもって----、學術の眞理を究め大いに勵んで行かう、我ら若人達よ。

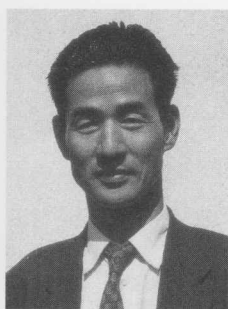
三番、おごそかに聳え立つてゐる富士山や清い甲斐の山や川の精をうけて、もろともに切磋琢磨し、天地自然のめぐみ、人間の本性をたすけ、のばして行かう。

2番歌詞の「日に新た、また日に新た」、3番歌詞の「贊くべし天地の化育」は中国の書「大學」「中庸」からの引用で、現在、校是として本校教育の指針となっている。「日新鐘」の命名も、旧校舎正面の壁面に掲げられた「贊天地之化育」も江口俊博校長の発案であり、同氏の書であつたらしい（第112回同窓会總會記念誌21ページ、永友幸壽氏の談話参照）。

新校歌は昭和23年以来現在まで52年間歌い続けられている。校内外から甲府一高の校歌は良いと賛辞をよく聞かすが、その良さは詩と旋律のいずれであろうかと吟味してみると、両方とも良いと思う人は私も含めて多い。

現在の新校舎の前庭に昭和60年度卒業生寄贈の校歌碑がある。創立105周年、強行遠足60周年の年度にあたる昭和61年2月19日に校歌碑除幕式が行われた。校歌が発表されてから37年ぶり、作詞者没後25年のことにて上條和子夫人が招かれたが、大雪で旧図書館前の碑まで辿り着くのに難儀されたという。

「百年のあゆみ」に校歌を楽譜付で載せる際、校歌碑は当然原文通りの信頼できるものと信じて私はその通りの文字で載せてしまったが、作詞者の左記原文詩と下線を付した8箇所が異っていることが今回判った。すべて平仮名を漢字に変えたものだが、作者が平仮名と漢字を吟味して使い分けていることを考慮できなかったものと思われる。校歌碑の詩文は昭和23年9月15日発行の甲府一高新聞に掲載された新校歌の文字に従ったことも今回判明した。正式に発表される1ヶ月前に、作者が在職中にも拘わらず、作者の諒解も得ずに原文を変えて発行してしまったのである。校歌の石碑は半永久的に残るので、やがてはそれが原典と思われこまれる惧れが多分にある。この際、費用をかけてでも正しい校歌碑に作り直すべきものと思う。



(上條馨氏、校歌を作詞した頃)

上條馨氏は大正10年甲府市御崎町の御崎神社宮司の家に生まれる。昭和13年甲府中學卒業、神宮皇學館卒業。御崎神社の宮司として、国語科の教諭として昭和21年から本校に勤め、29年、体調を崩され、退職。後に山梨学院大学の講師、同附属高校教諭。著書には「甲州風物誌」「續甲州風物誌」、歌集「風塵抄」「神道神學交論」などがあり、郷土史研究にも手をそめていた。昭和35年5月、和子夫人と結婚。翌36年正月に不慮の事故により40歳直前の若さで亡くなられた。

作曲者小松清氏は、明治32年(1899)秋田県に生まれる。作曲家、音楽評論家。小松耕輔・平五郎兄弟の弟。大正10年、東京帝國大学佛文科を卒業。音楽をルビエンスキー、クラウス・プリングスハイム等に学ぶ。旧制東京高等學校(現東大)教授、東京藝術大學講師、東海大学教授などを歴任。国際音楽評議会日本委員会委員長。主要著書には《西洋音楽通論》、デュラン《仏蘭西音楽夜話》(小松耕輔共訳)、《西洋音楽の鑑賞法》、リムスキー・コルサコフ《管弦楽法原理Ⅰ・Ⅱ》、《西洋音楽の鑑賞》、ラヴォア《フランス音楽史》(小松耕輔共訳)など多数ある。昭和50年(1975)東京で没す。享年76歳。甲府第一高等学校校歌は49歳の作品。

應援歌「鶴城に」(作詞者・作曲者不詳、宣揚歌「桐の葉」旋律の改編?)

現存する応援歌の中で最も古い曲と思われる。校舎が現在の舞鶴公園・県庁の辺にあった時代の作で、前回の試合に負けた悔しさを読み込んでいるところなどは古き佳き時代を感じさせる。

東京高等師範学校・東京文理大・東京教育大・現筑波大学(同窓会「茗溪会」)の宣揚歌「桐の葉」(桐の葉は同校の校章)に、甲府一高応援歌「鶴城に」は酷似していると樋泉明氏より聞く。歌詞が短く、テンポが速めで応援歌調の曲という説明も符合している。東京高等師範学校出身の甲府中学の教員が「桐の葉」の旋律を少し変えて新しい歌詞を付けて歌わせたのではないか。(樋泉明氏談)

茗溪会から樋泉明氏宛に送られた資料「茗溪854号」に作詞者大和資雄氏の桐の葉に関する文が載っていて、高師在学中の大正8年12月5日、「桐の葉」を作詞

した、大学昇格運動決起のために作った、旋律は昔の早慶戦（早・慶のいずれか不明）の応援歌の曲譜に合わせて作ったと書いている。

「桐の葉」の楽譜を茗溪会から取り寄せて見ると、確かに共通点多く「鶴城に」の元歌であると思われる。しかしリズムはかなり異っている。「桐の葉」は大正8年に作られたので、「鶴城に」は早くても大正8年以降に作られたことになる。大正8年から、昭和3年に現在の美咲町校舎に移るまでの9年間の何時、誰によって作られたかは依然分からない。

一．鶴城に櫻花咲き 人は皆歡樂に酔ふ

われ一人落花を浴びて 前の恥花園に泣きぬ

二．秋來る健兒の胸に 強き意氣宇宙も空し

櫻花の旗ひとたび振れば 醜の群れ微塵に飛ばむ

ヤッツケロ ヤッツケロ ヤッツケヤッツケ ヤッツケロ

応援歌「鶴城に」

作詞者・作曲者不詳
宣揚歌旋律の改編?

1. か く じゃ う に さ く ら ば な 咲 き
2. と き 来 た る け ん じ の む ね に

ひ と は み な か ん ら く に 酔 ふ
つ よ き 意 氣 う ち う も む な し

わ れ ひ と り ら っ か を 浴 び て ま へ の
櫻 花 の は た び と た び 振 れ ば し こ の

は ち く わ ん に 泣 き ぬ
む れ み ち ん に 飛 ば ん

ヤッツケロ ヤッツケロ ヤッツケヤッツケヤッツケロ

宣揚歌「桐の葉」

大和資雄 作詞
作曲者不詳

1. き り の 葉 は 木 に 朽 ち ん よ り
2. 日 の も と の を し へ の に は に

あ き 来 な ば さ き が け 散 ら ん
い と た か き ま な び や あ り と

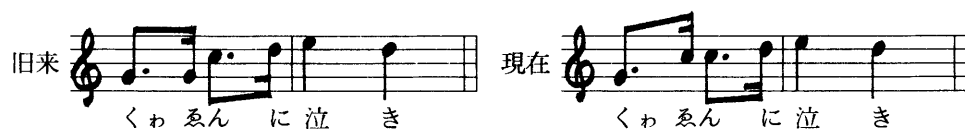
名 の み な る は い き を 捨 て て
ひ と も 知 る め い け い の み づ

醒 め て 立 て を の こ ぞ わ れ ら
よ し 濁 れ よ に ご さ ん よ り は

或いは早・慶いずれかの古い応援歌から直接「鶴城に」の替え歌を作ったとすれば、明治時代の作とも考えられる。古屋力氏（昭和33年卒）の話では松本深志高校の応援歌が「鶴城に」の旋律と全く同じであるという。松本深志高校から楽譜を取り寄せたところ、「打てば勝つ」という題名で、古屋氏の言う通り、「桐の葉」よりはるかに「鶴城に」に酷似していた。作られた時代や経緯は判らないという。「鶴城に」と「打てば勝つ」の双方が親子の関係でないとすると、両歌の親は「桐の葉」ではなく、早・慶いずれかの元歌から別々に取られた可能性が濃くなる。鳥取県の米子東高校その他でもこれらに似た旋律で歌われているらしい。

2番で「健兒の胸の」と歌われた時代もあったらしいが、現在は本来の「健兒の胸に」に戻している。

芦澤正巳氏（昭和34年卒）から旋律が以前と1箇所異ると指摘された。昭和から平成になる頃に、意図的にではなく、不注意な間違いから変わってしまったらしい。果たして訂正することがよいか少々迷うところである。



應援歌「起て起て起て健男兒」（作者不詳）

旋律の造りからは長調と短調が混在して古さを感じさせる。「鶴城に」と前後して作られたものと思われる。大正10年前後から昭和35年頃まで40年間も歌われたのに何故止めてしまったのか分らない。それから30年近く経った近年にこの応援歌は復活している。千野恒夫元本校教諭・教頭歌唱、依田道彦採譜で蘇ったもの。平成4年頃から再び歌われるようになったが、入学生の応援練習には入っていないながら、野球の試合には何故か歌われない。

江口校長の前任者田村喜作校長の時代、職員が校長派、教頭派、同窓会派に別れて分裂していた。有泉亨氏（大正9年入学、14年卒）は江口俊博先生追悼集に、「職員の集まった席上で校長のやり口を批判したことが校長の耳に入ったために学校を去るべく余儀なくされた一教諭が、教頭の新任式の際、壇上から校長の弾劾演説をやって生徒と一緒に《起て起て起て健男兒》を歌って去った。」と書いている。そして大正12年3月、入試問題漏洩事件が起こる。江口校長が大正12年6月に赴任する前の話。上記教諭がこの応援歌の作者ではないかと立証したかったが、実現できなかった。この応援歌が作られたのは大正12年以前の何時かも依然不明。

窪田丙午郎氏（大正13年卒、元本校教諭・教頭）も生徒の時この応援歌を歌っていたという。昭和31年卒業の樋泉明氏、33年卒の千野恒夫氏も在学中に歌っている。34年卒業の大西勉氏も在学中に歌ったが、やや下火であったという。七澤秀人氏（昭和37年入学）は吹奏楽部員で、在学中演奏した覚えが無いというから、昭和35～6年頃歌われなくなったものと思われる。芦澤正巳氏からこの曲にも1箇所以前と異なる部分があると指摘された。（楽譜は「百年のあゆみ」参照）



起て起て起て健男兒 覇氣ある健兒よ
 自彊の楯をば振りかざし 破邪の劍とりて起て
 撃てや懲らせや われらが敵を
 撃ちて勇姿を 世界に示すはこの秋ぞ
 フレー フレー 甲中（一高）

應援歌「希望の光」(作詞者・作曲者不詳)

現存する応援歌の中で唯一の短調。昭和に入ってからで作らしく、上記2曲に比べるとやゝ新しいと思われる。今回は資料がまったく得られなかった。

(楽譜は「百年のあゆみ」参照)

- 一. 希望の光身に浴びて 若人の意氣負うて立つ
いま選手等の門出を 空もとどろに應ふらん
- 二. 敵軍いかに猛くとも 忍び伏せたる梓弓
鍛へし腕引きしぼり 敵のかぶとを射落とさん
- 三. 見よ穹天の雲は垂れ 霸權を握るは今なるぞ
蛟龍の意氣胸に秘め いざや起て起てわが選手

應援歌「起て撃て勝て」(足立市朗作詞・作曲) (昭和27年)

現在歌われている応援歌の中では最も新しい応援歌である。歌詞は1番のみで、冒頭部分を繰り返す形になっている。旋律は明快で力強い。作者足立市朗氏(昭和28年卒)は当時3年生であった。足立氏は「幻の応援歌」と題して次のような興味深い記事を残している。('88発行、大阪山梨県人会70周年記念誌参照)

「(前略) 当時、応援団長だった私は、母校の伝統に新風を吹き込む為、新しい応援団旗と新しい応援歌(筆者作詞・作曲)を用意し山静大会(野球の甲子園地区予選)での発表を目指していた。しかし夢叶わず。この歌を後輩の応援団員に一小節ずつチーチーパッパッと悪戦苦闘しながら伝授したものの、その後どのように歌い継がれているか知らなかった。昭和52年のある日、テレビから流れる音に驚いた。甲府一高強行遠足で疲れた生徒に(吹奏楽の)先輩がラッパで応援しているシーンである。その応援歌、そのメロディこそ25年前、全校で歌うはずだった《起て、撃て、勝て》であった。口ずさんだ、涙が溢れ出た。」

現在も生徒の好む応援歌として盛んに歌われている。(楽譜は「百年のあゆみ」)

起て撃て勝て 甲府一高 一高
その名ぞ我が母校
仰ぐ芙蓉の峰さやか 穹天まさに轟かん
見よ精鋭の集えるを 結べる眉に必勝の
誓いは堅し我等が精鋭 おゝ
起て撃て勝て 甲府一高 一高
その名ぞ我が母校

應援歌「お御崎さん」(作詞者不詳・「花咲かじいさん」の旋律)

御崎神社は学校所在地の美咲町の町名と一致するこの地域の守り神であるから、

昭和3年に移転してきた以後の作であることは明白であるが、いつ誰が作ったか分からない。既成の旋律を借りることは当時は珍しくなかった。県下には、校歌でさえ替え歌で歌っていた高校が存在した。(楽譜省略)

お御崎さんの神主が 御神籤ひいて申すには
いつも一高 (は) 勝ち 勝ち 勝ち勝ち

應援歌「常勝一高」(作詞者不詳・既成曲旋律)

全国の多くの学生がこの同じ旋律で好んで歌ったので、遊び半分に作った替え歌がそのまま歌い継がれて残ったものと想像される。(楽譜省略)

一高が勝った ねえ皆さん
どうせ一高は 勝つわいな 勝つわいな
そうら勝った勝った ヤッコラヤノヤ

その他の応援歌

昭和26年1月23日付け甲府一高新聞に「応援歌入選決る」という記事があり、1位なしで、2位3-5小林光雄君、3位2-3清水公明君が入賞とあり、詩も載っている。1位の該当作品が出なかったので、作曲されずに終わったのだろうか。

また、昭和43年、甲府一高野球部は吉田高校を1対0で破り、甲子園50回大会に出場することになった。8月3日にその壮行会が行われ、卒業生島田武氏、平野忠彦氏等が作詞・作曲した新しい応援歌が贈られ、在校生、職員を感激させたと甲府一高新聞110号にある。その存在はどうなっているのだろうか。

甲府中學校寄宿舎寮歌(野尻抱影作詞、「嗚呼玉杯」の旋律)(明治42年?)

作詞者野尻抱影氏(本名正英)は明治18年に横浜に生まれる。大仏次郎の兄。早稲田大学英文科でラフカディオ・ハーンに学び、在学中に抱影の筆名で執筆活動始める。ハレー彗星の研究、冥王星の命名、翻訳、著述等で多くの作品を残す。明治40年5月に甲府中学校へ英語教諭として赴任し、寄宿舎舎監も兼ね、45年度まで在職。第10代校長大島正健の娘と結婚。昭和52年、世田谷で92年の生涯を終わる。《「中央線」第16号(昭和53年発行)より》

詩文の脇に明治42年4月20日とあるのが、この寮歌の作られた期日らしい。明治42年卒の若林貞雄氏は、「甲府中學校舎監であった野尻正英先生を煩はして作詞して頂いた。《甲中宿舎の歌》は当時われわれ全舎生の愛誦歌であった」と回想を創立70周年記念誌に書いている。(詩と旋律の結び付き不明確にて楽譜省略)

一、金甌無漏たぐひ無き 三千年の大八島
わきて自然の寵あつく 國の數より撰まれて
山河の粹を集めたる 吾等の甲斐を誇れ人

二. 山に白根の雪ありて 人に機山の偉圖ありき
彼の靈此の偉おのづから 宿せる既に凡ならず
かてゝ母校の懷に 學べる兒等よ何の幸

三. 其の若き子が行末の いや安かれといつくしみ
育み守る南北や 二寮の薨こゝぞ實に
時流の外に虹を吐く 自由の郷土自治の領

四. 自由よさあれ不羈は敵 放逸は此れ自治の賊
縁も深き室友と 規律に超へさる春秋を
いそしみ勵め諸共に 理想の道の果迄も

甲府中學校創立四十周年記念歌（渡邊義丸作詞、根本 剛作曲）（大正 9 年）

作詞者渡邊義丸氏は甲府中学の国漢の主任（大正 1～12 年在職）。大江丸のペンネームで「中學世界」に諸譚小説を書き、「渡邊義丸遺稿集」（渡邊豊視著）に集められている。和歌や漢詩もよくされた。顔が少し浅黒く男らしく、しかもテストの採点は甘いというので、生徒は喜んだが、悪童共が早速「黒砂糖」のニックネームを奉ったという。この歌はその場限りのものではなく、その後も生徒に愛唱されていたようなので、良い旋律だったのだろう。作曲は根本剛氏（大正 6～10 年在職、英語教諭）と判明。

甲府中學校創立四十周年記念歌

渡邊義丸 作詞
根本 剛 作曲



1. せ んこ に映 ゆる し らゆ きの ふ がく をた かく
2. 彼 のつ はも のの ゆ めの あと ふ かく うず むる
3. み なわ と消 えん 名 を負 ひて ひ とは さじゃうに
4. いまーし んせ いの かねー鳴 りて おくーる るものーは
5. こじーう のさくーら いくーた びか いうーき のいけーに

あ ふぎ 見て せ いら んめ ぐる や まか ひの
し たく さに ぶ かく のし ろの い しが きも
き づか んと あ らそ ひさ はぐ な かに して
ば うきゃくの か なし きふ ちに は うむ れと
散りーて 消え 我 がまなーび やも と しふ りて

き よ きて んち を え うら んに む ねに きざ んの
く づ れゆくー世 を ひたーす らに ま なび のみ ちに
ふ か きおもーひ を むねーに 秘め や がて さけ ばん
いっ きをー擧ぐーる ー わかーう どの う でに むげ んの
こ と ししじーふ の よはーひ 來ぬ よ ろこ びつどーふ

血 を受 けて う まれ 出で たる け んだ んじ
い そし める 我 がろ っびゃくの は らか らよ
と きを 待つ ぎ じん のね つは わ れに あり
ち から あり まゆーに いの ちの か げや どん
わかーう どの むねーに いくそーの おもーひ あり

一. 千古に映ゆる白雪の
富嶽を高く仰ぎ見て
青巒回る山甲斐の
清き天地を搖籃に
胸に機山の血を受けて
生れ出でたる健男児(甲斐健児)

二. 彼の強者ども(強兵)の夢の跡
深く埋もる(埋むる)下草に
舞鶴の城の石垣も
崩れ行く世を只管に
學びの道に勤しめる
我が六百の兄弟よ

三. 水泡と消えん名を負ひて
人は砂上に築かんと
争ひ騒ぐ中にして
深き思ひを胸に秘め
やがて叫ばん秋を待つ
義人の熱は我にあり(在り)

四. 今新生の鐘な(鳴)りて
遅くるる者は(を)忘却の
悲しき淵に葬れと
一簣を擧ぐる若人の
腕に無限の力あり
眉に命(生命)の影宿る

五. 古城の櫻幾度か
遊龜の池に散りて消え
我が學舎も年古りて
今年四十(路)の齡來ぬ
喜び集ふ若人の
胸に幾多(幾十)の思ひあり
()内は別印刷

甲府中學校創立五十周年記念歌(雑誌部員合作) (昭和4年、1929年)

昭和3年に御崎校舎が完成し、その年の7月に舞鶴城校舎から移転し、校歌も制定され、翌年には講堂も完成した。創立50周年は昭和5年の筈なのに、4年10月22日に校舎の落成式、23日午前創立50周年式典が挙行されている。落成式には前年できた新校歌「我等は日本に生れたり」の「校歌合唱」が歌われた。その日の午後の落成祝賀音楽会の中でこの記念歌は歌われた。また、夜の提灯行列では校歌行進曲と五十周年記念歌を歌ったと甲一物語にある。この歌詞の脇には「雑誌部員合作」と「創立五十周年記念誌」の中に書かれている。四十周年記念歌と同じ旋律に作詞したものであった。この後、60周年以降には記念歌は出て来ない。

平成4年の同窓会総会の折、事前に呼びかけられた年配の有志が大勢壇上に上がり、この歌を60年振りに高唱した。この企画をしたのは同窓会総会当番幹事の昭和35年卒の田中文隆、山本武雄、中込武久氏等であり、その前に佐野東徳氏(昭和3年卒、42~44年在職)が創立四十周年記念歌を歌唱、依田君美氏(昭和9年卒)が五十周年記念歌を歌唱し、山本武雄氏が採譜して準備してあった。当日は山本武雄氏の率いる30人の「東京ブラスソサイエティ」の吹奏楽伴奏で歌われた。その楽譜と録音テープが田中文隆氏から提供され、平成7年に同じ録音から依田が採譜したものと合わせてここに載せられることになった。尚、総会壇上での歌唱の様子のビデオテープも田中氏が保管している。ところが、この貴重な資料を提供してくださった田中文隆氏は、私達が取材した直後に惜しくも59歳で急逝されてしまった。

一. 南芙蓉の峰高く

水清き郷山梨の
徽典の流れよどみなく
星霜こゝに五十年
秋闈にもみちばの
夕日に映えて麗しき

甲府中學校創立五十周年記念歌

雑誌部員 合作
根本 剛 作曲



1. み	な	み	ふ	よ	う	の	み	ね	た	か	く	み	づ	き	よ	き	さ	と	
2. せ	い	ら	ん	め	ぐ	る	じ	ゃ	う	ほ	く	に	き	ぜ	ん	と	た	て	る
3. 聞	け	に	っ	し	ん	の	か	ね	の	音	を	か	う	じ	ゃ	う	燃	ゆ	る
4. 我	が	武	士	だ	う	の	香	も	た	か	き	あ	う	く	わ	を	お	の	が

二. 青巒めぐる城北に

巍然とたてる三層樓
機山の壯圖胸に秘め
大貳の熱をうけつぎて
希望かゝやく一千の
わが同胞の意氣見ずや



や	ま	な	し	の	き	て	ん	の	な	が	れ	よ	ど	み	な	く	
さ	ん	そ	う	ろ	う	き	ざ	ん	の	さ	う	と	む	ね	に	秘	め
わ	か	う	ど	の	た	か	な	る	む	ね	に	ひ	び	く	な	り	
す	が	た	に	て	義	理	と	な	さ	け	を	じ	ゅ	ん	ば	く	



せいーさ うこ こにーご じふ ねん あ き た け な は に
だいーに のね つをーう けつ ぎて あ き ば う か ら や く
てんーち のくわいく を た すく てふ お も き し め い を
に でう のせ んにーか たど りて 破 邪の つる ぎを

三. 聞け日新の鐘の音を
向上燃ゆる若人の
高鳴る胸に響くなり
天地の化育を賛くてふ
重き使命を擔ひつゝ
起て甲州の健男兒



も みち ばの ゆ ふ ひ に映 え て う る は し き
い っせ んの わ が は ら か ら の 意 氣 見 ず や く
に な ひ つゝ 起 て か ふ し う の け ん だ ん じ
か ざ し つゝ り さ う の さ と に す す む かな

四. 我が武士道の香も高き
櫻花をおのが姿にて
義理と情を純白の
二條の線にかたどりて
破邪の劍をかざしつゝ
理想の郷に進むかな

生徒会歌（小林綱夫（是綱）作詞、芦澤正巳作曲）（昭和36年）

甲府一高 生徒会歌

小林綱夫 作詞
芦澤正巳 作曲



1. に っ し ん の れ き し に な ー い ー て か ー
2. が く え ん の か ね は ひ び ー き ー て か ー



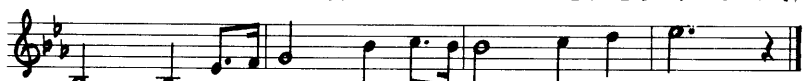
ぎ り な く も と め る ま こ と 富
ぎ り な く あ い す る へ い わ み



士 が 嶺 の と お き す が た は せ い
ど り ば は ひ か り あ ふ た れ ま な



しゅ ん の ゆ め を さ そ う ゆ う じ ゅ う の か い な を く み て り そ
び や は し ろ く 映 ゆ か が や け る ひ と み を あ げ て ふ き



う の 自 ー 治 に わ れ ら す す ま ん
う の 自 ー と め わ れ ら う た わ ん

一. 日新の歴史にないて
限りなく求める真理
富士が嶺の遠き姿は
青春の夢をさそう
友情の腕をくみて
理想の自治に我等進まん

二. 学園の鐘はひびきて
限りなく愛する平和
緑葉は光あふれて
学舎は白く映ゆ
輝ける瞳をあげて
不朽を求め我等歌わん

校内外で作詞と作曲を募集し、25点の歌詞が集まった。選考の結果、残った2点とも小林綱夫（是綱）氏（昭和38年卒）、高校2年次の作品であった。小林氏は県立図書館、石和町立図書館、大泉図書館等に勤務した。日蓮宗常德寺住職。

作曲者芦澤正巳氏（昭和34年卒）は高校2年時に、音楽部と別に応援団吹奏楽部を創設した一人。芦澤氏は大学時代に時々母校の吹奏楽指導に行った時にこの歌の作曲を募集していることを知り、応募したら当選したが、何点に応募されたかも知らなかったという。作曲の応募は16点あり、2段階の選考を経て芦澤氏の

作品が選ばれた。楽譜と歌詞が昭和36年9月15日発行の一高新聞に掲載された。今回作曲者に新聞の楽譜を確認したところ、6小節目と14小節目に2箇所ミスを指摘された。芦澤氏は伴奏付で作曲し、原譜を保存しているという。

生徒会讃歌（小林綱夫(是綱)作詞、樋口宙輝作曲）（昭和36年）

作詞者は生徒会歌と同じ小林氏。生徒会歌として募集した25点の中から選ばれた2点はいずれも小林氏の作品で、双方捨て難いということから、一方は生徒会讃歌とすることになった。作曲の応募は4点あり、樋口宙輝氏（昭和37年卒、3年次在学中）の作品が選ばれた。樋口氏はそれまでに作曲の経験は無く、恥しいので忘れて欲しいという。この曲の楽譜は見つからず、作曲者も楽譜を保存していないという。果たして全校で歌われたのかも判らない。残念ながら歌詞のみを挙げておく。

- 一. 春学舎の樹々若く あふるる血潮胸に秘め
真理を求む若人の 不屈の意気は空をさく
正しき道をあゆみつつ 共に求めんその力
- 二. 夏学舎に陽は強く 雲さんらんと光り行く
青春意気はここに燃え 熱誠こもる若人が
清心の音をかなでつつ 共に進まん永遠の道
- 三. 秋紺碧の空高く 我が学舎の鐘ひびき
木々の枯葉はおちるとも 若人にもゆ花の園
青春夢はここに満つ 共にかかげん自治の旗
- 四. 冬風雪にたえしのぶ 学舎に明日の風満ちて
不朽を求む若人の 鐘はすみてまゆかたく
凍れる星をあおぎつつ 共に残さんこの偉業
- 五. 春秋いつに変わらねど 青春血あり涙あり
三年の夢ははかなくも 伝統深き学舎に
高き理想をたくしつつ 共に歌わん自治の歌

強行遠足の歌「信濃路はるかに」（八田政季作詞、作曲者不詳）（昭和38年）

校内の公募で、昭和38年7月15日に募集要項が発表された。歌詞の応募は6点しか出ず、職員の八田政季氏と渡邊弘氏の2点が佳作に選ばれた。作詞者の八田氏は昭和32～44年在職し、後に県教委学校教育課長、駿台甲府高校校長を務めた。或る印刷された歌詞に誤字有りと八田氏の指摘どおり、発表直後の学校新聞の歌詞と比べると幾つも間違えていた。

作曲者については、「芦澤正巳氏に依頼して9月28日に発表にこぎつけた」と9

月30日付けの一高新聞に書いてある。再度確認したが、芦澤正巳氏は覚えがないし、誰が作ったかも知らないという。今回、強行遠足の歌2曲の楽譜を提示して思い出されることを期待したが、やはり全く記憶になく、その2年前に作曲した生徒会歌のことは明瞭に記憶しているというので、残念ながら「作曲者不詳」に戻ってしまった。戸田延子氏（昭和39年卒）歌唱、七澤秀人氏（昭和40年卒）採譜の楽譜が平成8年度甲府一高同窓会総会記念誌に掲載された。今回、斉藤正敏教諭（昭和41年卒）歌唱、依田道彦採譜と比較すると2箇所小さな相違点がある。

強行遠足の歌「信濃路はるかに」

八田政季 作詞
作曲者不詳

1. そらのあおさがわ こい うど の
2. くものながれが わせ い しゅ の の
3. つきのかげ りが わ か も の の

あせのしずく くにを うつした 日さる
あむねのうれい ぼを うつした 日さる

あきのはら 暮れもなずみて 友一情をたえり 諏訪のうーみ
あきのおか 灯の物見え 友きびしくもそえり 立つ八ツのーみ
あきのおか 灯の物見え 友きびしくもそえり 立つ八ツのーみ

うで組み合っ たた そのぬくも りが 過ぎし日 の
こえろえ合っ たた そのぬくも りが 過ぎし日 の

ゆめと 過ぎし日 の おもいな のだ
ゆめと 過ぎし日 の おもいな のだ

こ 行こう しな の じ を

一. 空の青さが若人の

あせのしずくにうつった日
秋の原暮れなずみ
友情をたたえる諏訪の湖
腕組み合ったそのぬくもりが
すぎし日の愛（夢）と
すぎし日の思いなのだ
歩こう 行こう 信濃路を

二. 雲の流れが青春の

胸のうれいをけした朝
秋の野辺霜しいて
厳しくもそそり立つ八ツの峰
声かけあったあの歌声が
若い日の夢と
若い日の思いなのだ
歩こう 行こう 信濃路を

三. 月のかげりが若者の

瞳に希望ともす夜
秋の丘灯のみえて
栄光をめざす一筋の道
脚そろえあったこのたかまりが
めざす日の夢と
めざす日の思いなのだ
歩こう 行こう 信濃路を

強行遠足の歌「歩みをいざ」（渡邊 弘作詞、作曲者不詳）（昭和38年）

「歩みをいざ」は「信濃路はるかに」と同じく校内の公募による。作詞者の渡邊弘氏は昭和35～44年在職し、最後に県教育長を務めた。今回、渡邊氏に発表当時の学校新聞で歌詞を確認したところ、間違いないという回答をいただいた。作

曲者については全く知らないという。「信濃路はるかに」も「歩みをいざ」も芦澤正巳作曲と印刷された記録があるが、間違いであると本人に確認済み。

斉藤正敏氏（昭和41年卒）は「強行遠足の歌2曲は作られた年の強行遠足前に校内放送で何回も流されて覚えたと思う。しかし、次の年にはもう歌われなかった。この歌を覚えているのは自分だけだと思っていた。」と言う。斉藤正敏教諭歌唱、依田道彦採譜。この曲の採譜については曖昧な部分はなかった。斉藤氏の37年前の正確な記憶力に敬服と感謝を申しあげたい。そのお蔭でここに譜面を載せられる。

一. 八ヶ嶺の山ふところに

美しくいろどるもみじ

雲白く山川清き

信濃路の秋をたずねて

たくましき歩みをいざ

われら甲府一高生

強行遠足の歌「歩みをいざ」

渡邊 弘 作詞
作曲者不詳



二. 同窓の心に深く

刻まれし思いも新た

日新の歴史とともに

心身のかぎりつくして

はるかなる歩みをいざ

われら甲府一高生



三. 山鳥の鳴く夜更けて

結ばれし心と心

かがやける明日に向かいて

朝焼けの雲のかなたへ

たしかなる歩みをいざ

われら甲府一高生



愛唱歌「太鼓橋（擬寶珠）」（作者不詳）

舞鶴城の校舎と大手橋をモチーフにしたもの。楽譜は見つからず。旋律も不明。

お堀の水はさびたれど

擬寶珠輝く大手橋

あまたの健児が踏み鳴らす

靴に鐵器の響きあり

愛唱歌「ソーライン」（作者不詳）

甲府中学の帽子の白い二本線と甲府高等女学校（後の甲府二高、現在の甲府西高校）の紫の袴の黒い二本線を組み合わせて歌ったもの。Hとは甲府高女のHigh

のこと。楽譜は見つからず。旋律も不明。

あなたは甲中の四年生 わたしはHの三年生
あなたはホワイトツーライン わたしはブラックツーライン
あなたは甲中の四年生 わたしはHの三年生
あなたはお濠の學舎よ わたしはポプラのあの校舎

愛唱歌「俺は一高の伊達男（仮称）」（作詞者不詳、「関東流れ者」の旋律）

御崎校舎の西を流れる相川で、詩や文芸を愛する軟派を気取りつつも、心には硬派の血をたぎらせている一高の伊達男を歌う。日川高校にも「流れ流れて日川の----」で始まる同じ旋律の曲がある。

流れ流れて相川の
そぞろ歩きは軟派でも
心にや硬派の血がたぎる
俺は一高の伊達男
ああ相川流れ行く

あとがき

予定の紙面の制限を遥かに越えてしまった。この度、新たな進展が幾つかあった。旧校歌の作詞者・作曲者と江口校長との交友関係、新校歌作曲者と近藤校長との関係、校歌碑が正しくないこと、「鶴城に」の元歌があったこと、「起て起て起て健男兒」が歌われなくなったのは昭和35年頃であったこと、「起て撃て勝て」の作者が判り、昭和27年作であったこと、創立40・50周年記念歌は同じ旋律で歌われたこと、40周年記念歌の作曲者が判明し、再現楽譜も入手出来たこと、生徒会讃歌は生徒会歌の副産物であったこと、讃歌の作曲者は判っているのに楽譜を再現できないこと、強行遠足の歌「信濃路はるかに」「歩みをいざ」の正確な歌詞が確認でき、作曲者は不詳であるが楽譜は再現出来たこと、昭和43年に島田武作詞、平野忠彦作曲の応援歌が母校に贈られたのに歌われず終いであつたらしい等々。これらの事柄は50年後、100年後には一層調べにくくなったり不可能になるであろうことを考えると、遅ればせながら今回は良い機会を与えられたことに感謝している。更に、私にとって教員生活最後の年にこのような有意義な機会を与えていただいたことは誠に幸運であった。将来、この記録が役立ってくれば一層有難い。

最も新しい歌でも40年近く経っているので、この辺で生徒、職員による新曲が生まれてもよい頃ではないか。私自身も永年歌い続けられるような曲を残したいと思いながら、生徒の覚える負担が増すだろうなどと詰まらぬ遠慮をしたため実現しなかった。

今回の資料収集にあたって、多大なご協力くださった樋泉明氏（昭和31年卒）、深沢太郎氏（平成8年卒）をはじめ、文中に引用させていただいた方々には心より御礼申し上げます。

校章探訪記

—発案者、興水進氏（昭和25年卒）を訪ねて、及び「校章の木、植樹式」に至る過程—

教諭 三 井 誠

記念すべき西暦2000（平成12）年、2月19日、土曜日の午後を利用し、（総務主任）大西勉教諭、（生徒会）清水康久教諭、三井とで春浅き北巨摩の地、須玉町小倉（こごえ）在住本校校章の意匠発案者、興水進氏宅を訪問することとなった。実は、新たな世紀を迎え、しかも本校創立120周年と言う記念すべき年に当たり、是非とも校章の元となった木を卒業記念樹にしたいと言う、3学年（平成12年3月卒業・主任保坂博文教諭）の強い願いからの訪問であった。

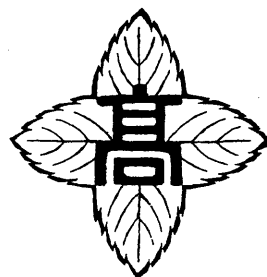
そもそも、本校校章のデザインに使われている4枚の葉は一体何だろうかと時折話題になるくらい校章の謂われについては不明になっている感が強く、やっと創立119周年同窓会総会記念誌の特集記事「母校の碑（いしぶみ）」の中で「興水進「校章」—興水進は昭和25年卒。在学中、校章募集に応じて入選。バラ科ズミ（俗名ヤマナシ）の葉を十字に組み合わせた意匠」と紹介されているに過ぎず、学校要覧・生徒会誌等にも全く説明されていないほどであった。

植樹をする以上、3点確かめる必要があった。その一、校章デザインの元の木を植えるくらいの発想は新制高校発足後、50年も経つ間に一度もなかったのか。本校敷地のどこかに「ズミ」の木は植えられていないのだろうか。その二、興水氏が考えた校章の葉は間違いなく「ズミ」の木なのか。その三、「ズミ」の木としても、果たして3月までに入手出来、植樹式の挙行は可能であろうか。

「その一」については、確かに少なくとも一度は植えられていたものであった。平成4年発行、本校百年誌466頁に、「創立95周年には、…また、山ナシの木（甲府一高校章でバラ科ズミ）を、…鯉沢町鳥屋地区内より採取して正面玄関西側に7本植樹した（『95周年綴』より）。」とあり、昭和50年にズミの木は植えられていたことが分かる。ところが、この木は残念ながら平成4年の校舎改築工事に因って所在不明となり、現存しないとのことである（消息通に依ると、地味な木故に多分「雑木」として扱われ、移植対象樹にならなかったのではないかと由である）。

「その二」については、図書館で有る限りの植物図鑑・百科事典で調べ上げた。結論を言うと、いわゆる「山ナシ」には四説あると思われる。①文字通り、梨の原種である山ナシ。②「ズミ」…しばしば群落を成し、長野県では「コナシ」とも呼ばれている。③「オオズミ」…原色牧野植物大図鑑では「オオズミ」の別名として「ヤマナシ」を記載。④「ズミ」の変種（「ズミ」の葉が特に大きくなったもの）。従来の解釈は②の説を採り、「ズミ」を校章デザインの木と定めているが、これを正確に決定した上でないと発注出来ないのである。

そこで、直接発案者の興水氏に何うのが一番ではないかと考え、同窓会名簿を繰って興水氏宅に電話を試みたのであった。記載は古くないかとの不安もあったが、元気に電話口に出られ、長く山梨中央銀行に勤められた後、今は農業をやっ



甲府一高の校章



ズミ (ヤマナシ)

ておられること、デザインは当時の一高図書館で牧野植物大図鑑を繰る中で、「山ナシ」の葉は「オオズミ」を念頭において描いたこと、更に、4枚の葉については、キリスト教の十字架をヒントにしたこと等を丁寧に話して下さったのである。

私は短絡にも校歌と校章はワンセットであり、校歌「甲斐の国 み中に建ちて…」を踏まえて校章は作られ、木の種類は山梨県の命名の元となった「山ナシ」を採用し、4枚の葉は甲斐の真ん中の位置を示したものと想像していただけない、全くの驚きであった。そして又、「十字架をヒント」のお話にしても当時の時代状況が絡んでいるらしく、もっとお聞きしたいとの思いが募ったのである。

さて、取り敢えず「その二」の問題は、思い掛けず解決されたが、「その三」の問題が厄介であった。とにかく、来月までに「オオズミ」を入手しなければならなかったのだ。牧野植物図鑑には「染料のズミ汁を採るため栽植する高さ10mの落葉高木。」とあるので、染料の産地を探り当てたならば苗木ぐらいいはあるのではと期待もしてみた。この問題は時間が逼迫する中で保坂3学年主任が献身的に当たった。県の林務部、鯉沢森林組合、植物に詳しい生物教師等に照会した結果、吉田の造園業者からやっと「ズミ」の木ならば3m程度の物が入手可能との連絡が入ったのである。造園業界では「オオズミ」の入手は殆ど不可能であり、山採りはその困難さからこれも絶望的であった。造園業者からすれば、「ズミ」で十分「オオズミ」の代替は果たせるとのことでは葉の大きさの問題だけであった。そこで記念樹のネームプレートは、興水氏の御教示通り飽くまで「オオズミ」に拘るが、日程的な問題もあり、実際の「オオズミ」の植栽はいつか機会を待つこととして、わざわざ埼玉から取り寄せると言う「ズミ」を、先の業者に正式に発注することになった（「ズミ」の入手も決して楽ではないのである）。

その後、植樹式では是非校章発案者の興水氏をお招きし、挨拶を頂こうと言うことになり、その連絡やらより詳しい当時のお話を伺うべく、先の訪問となったのである。

当日午後2時頃、興水氏宅に到着。大きな門が一際目立つ風格ある邸宅である。奥様と温かく迎え入れて下さり、約2時間お話を伺うこととなった。

前述の如く、初めはデザインの木の正確な名前を知るのが目的で思い切って電話してみたのであったが、思い掛けず十文字の葉の組み合わせが「十字架」をイメージにしたものであることを知らされ、結局興水氏宅訪問に至ったのであるが、氏の話は極めて感銘深く、単に偶然的にデザインは発案されたものではなく、そこには氏の天賦の才能と非凡な着想、粘り強さが反映されていること、価値観の変革期に当たったの熱い思いが流れていること、戦後民主主義の産物であること等を知ったのである。

以下、その折の話を4点に纏め、記すこととする。

(1) 先ず、私の知り得た興水氏の略歴を記したい。

昭和6年6月18日東京に生まれる。父は東京帝国大学工学部機械科を卒業した優秀な技術者で、「蛇の目ミシン」の会社役員にも名を連ねていたほどであった。戦争が激しくなった昭和19年7月、父の死を契機に、一家は疎開の意味もあり、郷里山梨の須玉に帰り住む。当時、都立十中（現都立西高校）の一年生であった

氏は、甲府中学一年生に転入学。そのまま新制となった甲府第一高等学校を昭和25年3月卒業。強い上級学校進学意志を持っていたが、義母の病状悪化と弟妹のことを思い、進学を断念。昭和26年山梨中央銀行に入学し、主に外国との交渉や電算機関係、審査部等の業務に従事し、『新業種別貸出審査事典』（1巻～5巻）の分担執筆に与かるなど秀れた業績を残した。山梨中央銀行を退職後、現在は悠々自適に農業に従事している。

なお、銀行時代から仕事の関係で宝石の原産国タイに何度も足を運び、タイ語に精通した氏は、ライフワークとして約11万語のタイ語から日本語への自動変換プログラムを開発中であり、その弛まぬ学者精神にも驚かされる。

(2) 氏の美術的センスは抜群であった。

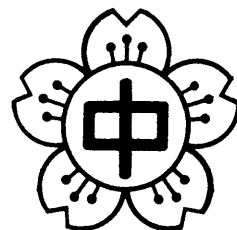
小学生の時描いた絵が文部大臣賞（全国で3人）を取り、当時のナチスドイツに交流絵画作品として渡り、巡回展示された由。ドイツ潜水艦（Uボート）に運ばれて戻ったと言うエピソードも興味深い。又、東武鉄道の観光ポスターコンクールにも入選し、賞金を貰ったりしたこともあり、校章デザインが採用された後には、ある社章のデザインを頼まれ、報償の映画館無料パスは大変同級生に喜ばれたとのことであった。

(3) 校章デザインは時代状況と絡まり、どのような意図の下に作られたのか。

次の3点が氏の校章デザインを考える際の立脚点であった。

① 甲府中学校の校章は桜をデザイン化したものであるが、敗戦直後のこともあり、桜には「予科練」や狭い国家主義のイメージが付き纏っていた為、この荒れ果てた日本を何とかしなければとの一途な愛国の思いを持ちながらもそのまま使う訳にはいかなかった。しかし、「愛国」が駄目でもせめて「憂国」ならば許されるのではないか。それならば同じバラ科で花の咲く木から選ぶことに拠って、「桜」のイメージを残そうと考え、前述した通り、図書館で牧野植物図鑑のバラ科の項目を片っ端から繰りながら、「山ナシ」を別名に持つ「オオズミ」に着目したそうである。鋸歯の葉のギザギザ数が多いので、減らしながら図案化したとのことである。

② 当時、敗戦後の混乱はまだ収まらず、物資も乏しく、窓ガラスが1枚もないような校舎に加えて、価値観の変換に伴う精神的荒廃もすさまじく、教師を教師とも思っていない生徒も多く、施設面と精神面の復興と安定が焦眉の課題だったそうである。占領軍に依る教育改革が進む中で、キリスト教の博愛主義は、当時の近藤兵庫第14代校長を始めとするクリスチャン教師の影響力もあってか、徐々に生徒達にも浸透していったようである（例えば、略年表を繰ると、昭和22年6月、憲法記念講話、講師志村牧師とある。その圧巻は昭和23年6月のキリスト教社会運動家として知られる賀川豊彦氏を招聘して行われた御崎神社での講演会であった。粗野で騒がしかった同級生がやがて一心に聞き入る姿に、奥水氏は大変感銘を受けたとも語ってくれた）。仏教徒であった奥水氏においても、漠然としたキリスト教への憧れが醸されていたと言う（殊にその人類愛の精神には惹かれるものがあつたそうだ）。従って図案化に際しては、是非とも十字架のイメージを葉の組み合わせに活かそうと考え、十字状に配したのであった。



甲府中学校の校章

③ ②の発想が優先されるが、当時、3枚の葉や5枚の葉の組み合わせは、旧制第一高等学校に代表されるように結構見られたが、4枚の葉は当時知る限りにおいては皆無であった故に、新鮮さを狙ったそうである。

なお、蛇足ではあるが、この(3)の件に関して、私なりにもう少し今日的視点も取り入れて敷衍したい。

要するに、校章の元の木「オオズミ」には、桜と同じく旧制甲府中学校の愛国と質実剛毅な精神が暗喩され、「キリスト教の十字架」をイメージ化した十字の葉の組み合わせに新生日本が標榜する平和と博愛の精神が託されているのだ。一見シンプルなように見えても、その中に愛国心と人類愛との相剋を弁証法的に、アウフヘーベンして見せた極めて密度の高い思想が宿っていると言えよう。見事に過去(伝統)と未来(創造)が融合されているのだ。21世紀を迎えようとする国際化時代にあつて、「普遍的なヒューマニズムを繁らせることが、やがて健全な愛国心を咲かせることに結び付くであろう」との当時の興水青年の思いを、正しく受け止めることが益々重要になっているのではないだろうか。

又、先に記した「校歌と校章はワンセット…」云々の私の思い込みだが、本校の略年表に拠ると、昭和23年2月24日に校章は選定され、その8ヶ月遅れの同年10月22日に新校歌発表会が行われたとある。従って確かに氏が新校歌から影響を受ける筈はないのであるが、この事実を抜きにすれば、「甲斐の国 みに建ちて…」を象徴化している解釈も、決して牽強附会とはいき切れないのではないか。寧ろ期せずして校歌と校章が一体化したと言うべきではないだろうか。興水氏もそのように解釈して貰っても一向に構わないとおっしゃってくれた。これは秀れた文学と同じで、作者を離れた広い解釈の余地を残す所に改めてこの校章の卓抜さを感じるのである。

(4) 民主主義が反映された投票で、圧倒的多数で採択される。

昭和22年、近藤校長の積極的な後押しもあって、生徒の自治を謳った「山梨県立甲府中学校生徒自治法」が制定されるなど、民主主義が急速に校内にも浸透しつつある中で、新校章(当時は帽章の性格が強い)の募集は行われた。従って、教員は勿論、在校生徒、卒業生諸氏にも広く呼び掛けられ、約20点の応募作品が集まったと言う。民主主義に則って、採択は投票で決めようということになり、教員・生徒それぞれ平等に一票ずつ投票したそうである。結果は、2000余票中、氏のデザインは約1600票と言う圧倒的多数で採用されることになった。当時の美術教師からは、十字の葉の組み合わせの斬新さが高く評価されたそうだ。山梨日日新聞にも早速載ったが、肝心の木の種類は桜になっていたとのことである(参考資料1)。

以上、4点について記してみたが、敗戦直後の一高の様子や教育の問題についての氏の見解も極めて興味深いものであった。あつと言う間の2時間余の取材であったが、記念の写真を撮り、2月29日の植樹式での御挨拶をお願いして我々は暇乞いすることとした。久しぶりに貴重な話を聞くことが出来た喜びと軽い興奮を覚えながら家路に着いたのであったが、雪を頂いた南アルプスの峰間に沈もうとする夕陽の美しさは格別であった。

(なお、植樹式のことや、その折の興水氏の有意義な話についても触れたかつ

参考資料1

昭和23年3月10日 山梨日日新聞記事
「第一高校の帽章きまる」

新制高校の実施に伴いその名も県立甲府第一高等学校となる甲府中学では4月1日からの新発足に先立って新たな帽章を制定することになり、その図案を全生徒から募集、審査した結果、四年生興水進君の考案による桜(ママ)の葉の中央に高の字を配した制章に決めた。

また帽子の2本の白線をそのままにするか廃止するかについて目下頭をひねっている。〔トツ版は第一高校の新帽章 ※写真省略〕

たが、紙数の関係で割愛せざるを得ない。唯、保坂3学年主任作成の「植樹式要項」については、記録上大切な為、参考資料2として載せておく。）

さて、植樹式から約2ヶ月経った春の真中、何と今年は殆ど期待していなかった「オオズミ（ズミ）」の花が三輪ほど開いているではないか。小さな白い花だが確かに桜そっくりの形をしていた。…

「ミレニアム 心語るや 酸実（ずみ）の花」

平成12年11月3日記

〈付言〉

私事で恐縮であるが、30年以上も前に入学した当時、この校章に不思議な魅力を感じていた私は、書きやすいことも手伝ってか時々手慰みにノートの隅に手書きしたものであった。その所為もあるのか、多少大袈裟ではあるが、この不思議な魅力と校章の謂われへの疑問は長く私の心の底に残り、その解明を願って来た。その意味で、この拙文を記すことは私にとって又とない機会でもあり責務のような気がする。まさに、現在への問い掛け無くして、過去は答えてくれないのであ

平成12年卒業生 植樹式について

日 時： 平成12年2月29日（火） 午後2時から

場 所： 甲府一高図書館前の庭

出席者： 興水 進 氏 （校章デザイン）

校長、両教頭、事務長、総務主任、第3学年職員

宮下 隆（生徒会長）、望月智明（同副会長）

各クラス正副理事（16人）

植樹及び支柱設置： 富士吉田造園 渡辺 氏

提示板作成及び設置： アール・ムコヤマ（甲府市）

次 第

（司会 学年副主任）

- 1 生徒代表植え込み（生徒会長）
- 2 生徒代表あいさつ（生徒会副会長）
- 3 興水さんあいさつ
- 4 校長からお礼のことば
- 5 学年主任からお礼のことば



興水進氏（中央）



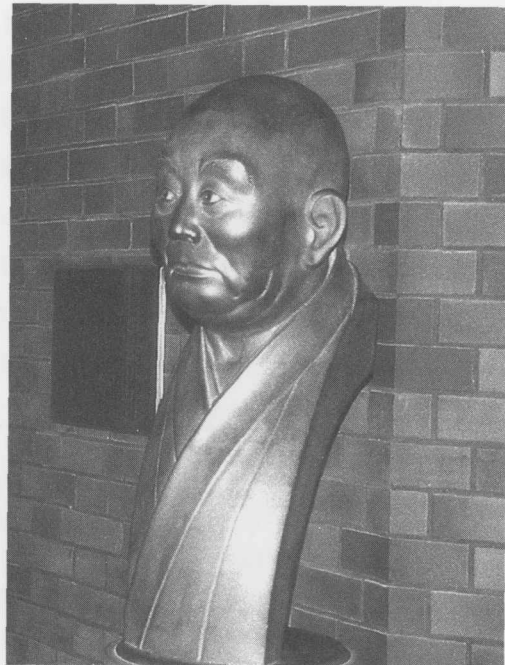
植樹式

石橋湛山先生像設置の由来

教諭 大 西 勉

平成6年（1994）7月、甲府一高の新校舎建設事業は、文化創造館「日新館」の竣工をもって、すべてを完了した。

昭和3年（1928）、甲府城址内から現在地に移転し、以後、70年近く“御崎町”にそびえてきた懐かしの学舎は忽然と姿を消し、代わって新装なったアーバン・インテリジェント・ハイスクールと呼ばれるスマートな校舎には、生徒たちの屈託のない、爽やかな歓声がこだまする。歴史は同窓生の感傷にはおかまいなしに巡り、まためぐっている。



その節目の年となった9月27日、甲府一高創立114周年記念式典にあわせて、100周年記念館玄関正面に石橋湛山翁の胸像が設置され、学校、同窓会、石橋家の人々によって、除幕式が行われた。

その時から6年余、ブロンズ製の湛山像は、愛くるしくも見えるすっきりした顔だちで、静かに佇む。

胸像わきには、次のような銘文が置かれている。



石橋湛山先生は、山梨と母校県立甲府第一高等学校が生んだ偉大な先輩である。明治17年（1884）に生まれ、明治28年（1895）から同35年（1902）まで山梨県尋常中学校（現、甲府一高）に在学、特に札幌農学校でクラーク博士に学んだ大島正健校長の影響を強く受けた。早稲田大学に進み、卒業した後、東洋経済新報社で、主幹、社長を務め、大正から昭和にかけて民主主義、自由主義、平和主義を貫く論壇の雄として大いに活躍した。

第2次世界大戦後、政界に入り、大蔵大臣、通商産業大臣を経て、昭和31年（1956）に内閣総理大臣に就任した。翌年、病に倒れ、惜しまれて任を辞したが、その後も、中国、ソ連を歴訪、両国との国交回復の土台をつくるなど、昭和48年（1973）、88歳で死去するまで国際平和活動に力を注いだ。

日本を代表する言論人、政治家として世評ますます高い石橋湛山先生の胸像を、石橋湛山記念財団の御厚志を得て、ここに母校の一隅に据えて顕彰することは、学窓を同じくするものの限りない喜びである。



母校に据えられた胸像は、財団法人・石橋湛山記念財団（理事長は湛山翁の長男石橋湛一氏）の設立20周年記念として、彫刻家の鯨内佐斗司氏に依頼、制作された三体のうちのひとつ。

一体は翁が長く学長をつとめた立正大学石橋記念講堂ホール、一体は社団法人・経済倶楽部（当時高柳弘理事長）の談話室、そして、もう一体が母校の甲府一高に贈られたのである。

経済倶楽部は、翁が長年主幹、社長として健筆をふるった東洋経済新報社（現社長、神尾昭男氏）と学界、経済人との交流の場として創設された社団法人。その談話室は常時会員に開放され、毎週金曜日に開かれる定期講演会は、そうそうたる財界人らで常に満席になるという。まさに「論客・湛山」の面影を置くにふさわしい場所といえるだろう。

とはいえ、我々甲府中学・甲府一高同窓生の手前みそであるかもしれないが、母校の学舎こそ翁の胸像が立つにふさわしいという想いを強くするのである。

その想いとは、今から36年前の昭和40年にさかのぼる。この年、本校には創立85周年事業として、甲府中学校第7代校長・大島正健先生彰徳碑が建立され、除幕式が行われた。彰徳碑建立発起人には湛山翁も名前を連ねていた。

大島校長の顔がレリーフされた碑板には、大島校長が札幌農学校で教えを受けた、クラーク博士の「Boys be Ambitious」と同校長作で自筆の漢詩「憶クラーク先生」が刻み込まれ、「Boys be…」の英文は翁自らが筆を執ったのである。

この時、湛山翁が、感慨を込めて述べた祝辞のもようは、除幕式に同席した同窓生の作家・中村星湖氏（明治38年卒）が綴った回想文で知ることができる。



湛山は黒の背広で杖を片手に壇上に立ち静かに話しはじめた。

「不名誉なことだが、自分は甲府中学を2度落第した。しかし、そのため大島校長の教えを受け、クラーク先生の精神を知ることができ、それまでとは違った覚悟と方針を持って中学を卒業し、長い道中を歩んできた」

あらまし、この辺りまで淡々と語ってきて、校長との出会いを追憶しての胸迫る感慨のためか、突然絶句した。冒し難い肅然とした空気のなかで、出席者は首を垂れて待った。

「不思議なことですー。実に不思議というよりほかにない」

湛山はそれだけをつけ加えて壇を降りた。



湛山が、戦前時流におもねず、軍部に屈せず、徹底した自由主義、民主主義、平和主義を貫いた硬骨のジャーナリストであり、戦後政界において己れの哲学と見識をもち、信念と節操を失わなかった希有のステーツマンであったことは、いまや世の常識であるが、その思想と人格の起点と核心をなしたものがクラーク先生の直弟子大島校長との運命的な邂逅であったのである。

湛山と大島校長との出会いとなった当時の学舎は、甲府城址内にあった。しかし、その伝統を引き継いだ、現在の甲府一高の校内に両巨星のモニュメントが、30年という時空をへだてた今、相会することになり、同窓生としての感慨もひと

しおと言わざるをえない。

湛山像が据えられた100周年記念館玄関は、約70メートルの距離を隔てて、ちょうど大島校長彰徳碑が望める位置にある。1世紀ちかい以前の恩師と生徒が、あたかも互に見合う位置関係である。湛山翁の胸像は、まさにふさわしい場所に置かれたと言えよう。

「湛山翁母校に還る」の感激を味わうことができた経過には、幾多の同窓生、先輩の思い入れと、関係者の理解があつてのものだった。

湛山翁を顕彰するなんらかのモニュメントを母校に残したい、という願いは翁が逝去した直後から、同窓会の中でしばしば話題になっていた。中でも、甲府・古守病院の古守豊甫院長らの熱意は強かった。その気持ちは韮崎の外科医院の葉袋健氏、同氏の伯父で葉袋経済研究所所長・葉袋進氏らを通して、湛山翁の長男で石橋記念財団理事長を務めている石橋湛一氏に伝えられていた。

そうした経過の中で、石橋記念財団の湛一氏から、胸像制作の話が寄せられた。願ってもない巡り合わせだった。この好機を逃すわけにはいかない。早速、伊藤嘉雄校長（当時）太田源一郎同窓会長、保坂甲府一高事務局長、同窓会担当職員、の筆者の4人で東洋経済新報社を訪問した。湛一氏に高柳経済倶楽部理事長、葉袋進氏を交えた話し合いは、終始なごやかに進み、胸像の甲府一高への設置はふたつ返事で実現したのである。

湛山翁の胸像は、このとき既に、経済倶楽部談話室に設置されており、太田同窓会長以下4人は、その出来栄に大いに感激したことを覚えている。

以後、受入れの窓口を井上雅雄同窓会副会長にお引き受けいただき、設置位置の決定、川口の美術製作所からの搬走、台座制作工事などが手際よく進められた。こうして同窓会一同の長年の夢が叶ったのである。

除幕式には、湛一氏、太田同窓会長、伊藤校長、古守院長、PTA役員、教師・生徒代表など、多くの関係者が出席して、晴れやかに行なわれた。

湛一氏は「父が愛してやまなかった母校に、父の胸像が設置されることは感謝に絶えない。湛山の精神が生徒たちに受け継がれることを願う」と挨拶された。感激の1日であった。

創立120周年記念事業

創立120周年記念事業の構想は、平成7・8年の時期においても同窓会・PTA役員、学校関係者の間でしばしば非公式に話題になることはあったが、このことについての議論と検討が公式に行われたのは、平成9年に入ってからであった。

同事業の具体化は、同窓会・PTA・学校の3者の予備協議を経て、平成9年12月25日の創立120周年準備委員会から始まった。同委員会は、同窓会正副委員長・庶務、会計、事務局長、平成12年度（創立120周年当該年）同窓会実行委員長（昭和43年卒業）、PTA正副会長、校長、教頭、総務主任で構成された。平成10年1月・2月の同委員会で事業の大綱と実行組織としての同窓会・PTA・学校の3者で構成される記念事業協賛会と執行機関としての3者の代表からなる協賛委員会の体制が、まとめられた。4月末から5月初めにかけて事業の大綱と協賛会・委員会の組織が、同窓会総会、PTA総会、職員会議においてそれぞれ承認・決定された。事業の1つに奨学金強化事業が挙げられていたが、平成10年4月、高遠奨学金役員、同窓会正・副会長、校長、総務主任が協議し、従来2本だけであった同窓会奨学金と高遠記念奨学金を合同し、支給額を増額、記念事業基金の一部を財源に加え、奨学金体制を強化することを決定した。なお奨学金の増額支給は、120周年に先行して平成10年度から施行されることになった。

平成10年10月16日、第1回創立120周年記念事業協賛委員会が開かれ、事業概要と委員会内に総務、記念事業、記念行事、記念誌編集、募金の5部会を設置することが、決定された。委員会の発足と同時に募金部会の活動が始まった。次の資料は同窓会員あての趣意書である。

母校創立120周年記念事業協賛募金の趣意書

皆様にはますます御清祥のこととお喜び申し上げます。また、平素から母校並びに同窓会活動につきまして格別の御高配をいただきまして誠にありがとうございます。

さて、母校、山梨県立甲府中学校・甲府第一高等学校は、明治13年（西暦1880年）に県下で最初の公立中学校として創設され、平成12年10月（2000年10月）には創立120周年を迎えます。続く平成13年（2001年）は、19世紀後半から始まった母校の歴史の中に3つ目の世紀の第一歩を刻む年であります。この大きな節目に当たり記念事業を実施し、母校の教育の発展・充実に資することにしたいと存じます。同時に、この事業を通じて母校の120年の歩みと伝統を振り返り、母校で過ごした青春に思いをはせ、誇りとともに明日への糧としたいと考えております。

学校・PTA・同窓会の3者で準備委員会を開き、慎重に協議した結果、過去の例にならない事業の協賛会を結成いたしました。

今回は、20年前の創立100周年に続く記念事業として企画され、今年5月2日の同窓会総会において基本計画が提案され、同窓会としての御同意を得、学校とPTAからも賛同をいただきました。左記の記念事業は、必要資金として50,000,000円が見込まれますので、

皆様の母校愛に基づく募金によって実現したいと存じます。そう申し上げても、現下、非常に厳しい経済状態であります。募金に御協力いただくことは、大変な御苦勞をおかけすることと存じます。そこで本会は、記念事業の内容を厳選し、次の節目では手遅れになるおそれのある歴史資料・記念品・美術品を保管、収集、展示するための記念館整備と奨学金の資金強化等5つにしました。

母校・同窓会の栄えある将来を深慮くださいますて本事業の完遂に向けて皆様の御理解と特段の御支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成10年10月16日

山梨県立甲府中学校・山梨県立甲府第一高等学校

創立120周年記念事業協賛会 会長 海 沼 昭

◇記念事業概要◇

- 1 100周年記念館改修整備事業（予算30,000,000円）
 - ・ 創立100周年記念事業で建設された記念館改修（館内照明設備、トイレ新設等）
 - ・ 館内整備（保管室、展示室、会議室、事務室、ロビー等）
- 2 奨学金強化事業（予算10,000,000円）120周年の平成12年に先行して本年から実施
 - ・ 高遠奨学金と同窓会奨学金を統合し、高遠・同窓会奨学金と名称を改めるとともに、給付金を増額毎年 各学年2人 計6人 1人年額 100,000円
- 3 記念誌の刊行（予算5,000,000円）
 - ・ 「100周年記念誌」以降の記録と補遺を中心に編集
- 4 記念行事への協賛（予算5,000,000円）
 - ・ 式典・公演等
- 5 同窓会名簿の発行（特別予算措置不要）
 - ・ 従来の名簿に続く事業として、専門業者に委託 予算措置不要

同窓会の募金目標は3者の中でもっとも高額で厳しい経済情勢の中で募金活動は困難であったが、各学年の募金委員の奮闘により目標を達成する学年が次第に増加した。現在なお奮闘中の学年もある。

同窓会については平成5年に校舎の全面改築に際し、多額の寄付を頂戴した上での募金活動であったことを考え合わせると母校への尽きぬ貢献にただ敬服するのみである。

P T Aについては10年度卒業生保護者から募金活動が始められ、平成11年度全学年保護者への募金活動が行われ、平成12年度入学生保護者の募金がこれに続いた。この間11年卒業生、13年度卒業生からの卒業記念品が基金に寄付された。このようなP T Aからの事業基金調達への多大な貢献は特筆しておきたい。

平成10年度職員の募金が行われ、11年度・12年度新任職員の募金もこれに加わった。平成12年度は旧職員への募金も行った。

以上3者の募金活動の結果平成13年2月末時点で目標の9割近い募金を達成することができた。

120周年記念事業と関連・平行して県と折衝して県費による校内施設の整備を行なった。12年2月の100周年記念館1階大会議室照明灯増設であるが、これは120周年記念事業の1つでもあったが、県の施設整備事業として実現した。この

ほかいくつかの県の校内整備事業があるが、その主なものは11年8月の硬式テニスコート防球ネット工事、12年11月の野球部部室改修工事などである。120周年記念事業期に合わせて、これらの県の施策も加わって校舎が一段と整備されたことについては、まことに時宜を得たもので県への謝意を表するものである。

記念事業、記念行事、記念誌編集についてはそれぞれの部会ごとに委員会を開き準備を進めてきた。実施内容は以下のとおりである。

120周年記念事業部会報告

◇100周年記念館整備事業について

- (1) 1階会議室照明強化・・・H11年度県費で完了
- (2) 1階男女トイレ設置
- (3) 2階事務室南壁扉設置、西壁窓設置
- (4) 2階中央移動壁存置・固定化
- (5) 2階北室 資料保管室（西側）・展示室（東側）
パーティション固定壁設置
- (6) 2階東部スペースのホアイエ（ロビー）化、応接用具設置
- (7) 2階事務室
 - ①水道設置
 - ②エアコン設置
- (8) 2階資料室内備品
 - ①書庫、金庫、保管庫、図面整理庫、物品棚、書画収納庫等設置－完了
 - ②展示用備品（陳列ケースetc）－資料整備作業と平行して設置
 - ③整理記録・収納用消耗品－②に同じ
 - ④事務室内整備

※（2）～（5）・（7）については山市成工・大久調音により平成12年7月
工事完了

◇奨学金強化事業について

強化のための新財源10,000,000円を120周年事業協替募金より充当
生徒への増額支給は平成10年より実施

◇今後の課題

- ・資料整備事業、新資料の発拙収集
- ・展示スペース（インテリア）の完成
- ・記念館管理体制の確立
- ・事務室整備

山梨県立甲府第一高等学校

創立120周年記念式典 次第

平成12年10月20日

山梨県民文化ホール

次 第

- 1、開 式 の 言 葉
- 2、国 家 斉 唱
- 3、校 長 式 辞
- 4、来 賓 式 辞

120周年記念事業協賛会会長

同窓会会長

P T A会長

- 5、来賓紹介・祝電披露
- 6、生徒会長挨拶
- 7、感謝状ならびに記念品贈呈

歴代校長

永年勤続職員

- 8、受賞者代表挨拶

歴代校長

永年勤続職員

- 9、校歌斉唱

- 10、閉式の言葉

感謝状贈呈者

歴 代 校 長

第26代 三 澤 弘 毅

第27代 廣 瀬 重 雄

第28代 伊 藤 嘉 雄

第29代 関 口 稔 夫

第30代 雨 宮 惇

永年勤続職員

保 坂 博 文

藤 巻 敬 介

矢 島 夏 江

甲一音楽会 プログラム

平成12年10月20日

山梨県民文化ホール

テナー独唱

泣かないお前 (E. D. クルティス作曲)
歌劇「トスカ」より「星も光りぬ」(G. プッチーニ作曲)
グラナダ (A. ララ作曲)

独 唱 川上洋司
(昭和44年卒、東京芸術大学卒)
ピアノ 牧口純子

メゾ・ソプラノ独唱

この道 (北原白秋作詩・山田耕筰作曲)
歌をください (渡辺達生作詩・中田喜直作曲)
落葉松 (野上彰作詩・小林秀雄作曲)

独 唱 金森静子
(昭和34年卒、東京芸術大学卒)
ピアノ 牧口純子

ソプラノ独唱

アヴェ・マリア (F. シューベルト作曲)
忘れな草 (E. D. クルティス作曲)
歌劇「トスカ」より「歌に生き愛に生き」(G. プッチーニ作曲)

独 唱 林ひろみ
(昭和33年卒、東京芸術大学卒)
ピアノ 牧口純子

バリトン独唱

歌曲集「ひとりぼっちがたまらなかったら」より (寺山修司作詩・大中恩作曲)
幸福が遠すぎたら 半分愛して
もんだいは ぼくが死んでも
かなしくなったときは 劇場
恋のわらべ唄

独 唱 平野忠彦
(昭和31年卒、東京芸術大学卒)
ピアノ 甲山紀子

混声四重唱

オペレッタ「メリー・ウィドウ」より
「愛の二重唱」(F. レハール作曲)

Sop. 林ひろみ Ten. 川上洋司
M.S. 金森静子 Bas. 平野忠彦
Pf. 牧口純子

ピアノ独奏

ピアノのための3つの作品Op.15より (パンチョ・ヴラディゲロフ作曲)
秋のエレジー
ユモレスク

ピアノ 浅川豊夫
(昭和30年卒、東京芸術大学卒)

太鼓アンサンブル

唐子 (天野宣作曲)
太鼓の為の組曲「風林火山」より「山」の章 (天野宣作曲)

天野宣&阿羅漢
(昭和28年卒、
甲府市指定無形文化財保持者)

山梨県立甲府第一高等学校 創立120周年記念 甲一美術展

平成 12年10月19日（木）～23日（月）

会場 県民情報プラザ 地下展示場

出品者及び作品一覧（◆印 物故者・卒業年順）

◆望 月 春 江 （大正2年卒）〔蝶と花〕〔こぶしと鯉〕

甲府市増坪町に生まれる。東京美術学校日本画科を経て1928（昭和3）年第9回帝展 翌年第10回帝展に連続特選を受賞、以後受賞歴多数。1937（昭和12）年 山梨美術協会の結成に参加、翌1938年（昭和13）年には日本画院を結成し、1958（昭和33）年日本芸術院賞を受賞。

◆米 倉 壽 仁 （大正11年卒）〔作品A〕

甲府市柳町に生まれる。教職に就く傍ら独学で絵画を学び、一貫してシュールリアリズムの作品を描き続けた。1952（昭和27）年前衛美術団体サロン・ド・ジュワンを結成。1988（昭和63）年には山梨県県政功労者として表彰される。

◆望 月 定 夫 （昭和5年卒）〔苑〕〔春蘭〕

甲府市増坪町に生まれる。東京美術学校日本画科を経て1942（昭和17）年第5回新文展に初入選 以来日展 日本画院展 日本美術協会展に出品。1953（昭和28）年 日展特選 白寿賞 朝倉賞をはじめとして受賞多数。

◆須 藤 貌 （昭和8年卒）〔タゴールの詩によす〕

甲府市千塚に生まれる。東京美術学校日本画科卒業。日本画院、日展に出品。1937（昭和12）年山梨美術協会の結成に参加。郷里の美術教師として教鞭をとる傍ら制作を続ける。

◆三 枝 茂 雄 （昭和12年卒）〔絶域〕

甲府市城東に生まれる。東京美術学校日本画科卒業。郷里の美術教師として教鞭をとる傍ら制作を続ける。1950（昭和25）年 国画会展初入選以来 国画会を中心に作品を発表する。強い精神性を宿す水墨着彩により独自の画境に到る。

◆野田修一郎 （昭和20年入）〔樹蔭〕

山梨県に生まれるが戦後東京に移住。東京芸術大学日本画科卒業。1984（昭和59年）日展特選を受賞。1989（平成元）年 山梨県立美術館主催の郷土作家シリーズに出品。

◆原 田 勝 （昭和29年卒）〔甲斐駒ヶ岳〕

甲府市に生まれる。多摩美術大学を卒業。1963（昭和38）年独立展入選以後 中央の画壇には発表していないが、郷里の美術教師として教鞭をとる傍ら制作を続ける。

◆加賀美 勲 （昭和33年卒）〔卓上風景〕〔野原〕

甲府市酒折町に生まれる。東京芸術大学油画科を卒業後大学院に進み、1966（昭和41）年愛知県立芸術大学に赴任。安井賞展、日動展出品をはじめ個展、グループ展多数。

◆山 川 輝 夫 （昭和34年卒）〔育みの間〕〔P〕

東京八王子に生まれ甲府市に疎開。高校卒業まで甲府市に在住。東京芸術大学油画科を卒業後、大学院に進み、1981（昭和56）年東京芸術大学助教授に就任。国際形象展を中心に精力的に発表を続ける。グループ展、個展多数。

◆佐 野 智 子 （元本校教員）〔原生花園〕〔原〕

東京に生まれる。女子美術大学卒業後山梨県に移住し、美術教師として教鞭をとる傍ら制作を続け、創元会、日展を中心に出品を続ける。

145

創立120周年
記念式典・甲一音楽会



記念式典



天野宣 & 阿羅漢の太鼓演奏



金森静子の演奏



来賓と生徒



望月春江
「こぶしと鯉」

創立120周年
甲一美術展・記念事業



開会式



美術展会場

改装された百周年記念館内部



改装された野球部部室



回想と寄稿

この項は同窓生諸兄の書かれた学校への回想と、新たに寄せていただいた寄稿とによって構成される。

前半部は同窓会誌その他に掲載された同窓生諸兄の甲府中学、甲府第一高校在学時代の回想などを再録させていただいた。

後半部は、現在社会の第一戦で活動される同窓生諸兄から卒業後の歩みについて新たに一文を寄せていただいたものである。

回 想	笠 井 重 治	「甲府中学校創立100周年記念に際して」から
	石 橋 湛 山	「三人の校長」他から
	望 月 春 江	「なつかしい甲府一高」
	渡 邊 大 蔵	「一本の日章旗」
	金 丸 邁	「鎮魂の五十回忌」から
	三 井 伸 夫	「生物部で活躍した高校時代」他から
	山 村 正 光	「君島を憶う」から
	中 沢 新 一	「ピューリファイ」から

寄 稿	「私の映像の原点は甲府第一高等学校だ！」	小 林 俊 一
	「オウムとの闘い」	井 上 幸 彦
	「音楽家としての半生」	平 野 忠 彦
	「甲府一高と私の人間形成」	内 藤 悦 次
	「変化のゆくさき」	五 味 文 彦
	「私の競技生活」	恒 吉 恵 子

回想

笠井重治

「甲府中学校創立100年記念に際して」から

甲府中学校（現甲府一高）は寛政年間に徳川幕府が甲府城の南側の地に徽典館を創建し、明治初年に師範学校となり、後に県立甲府中学校となりました。明治33年4月25日甲府城内に校舎が新築落成され、錦町の師範学校より全校生徒が移転しました。

青銅の擬宝珠で飾られた太鼓橋を渡って登校した生徒諸君の感激を追想して感慨無量であります。

甲府中学校は全国的に有名でありまして、優秀なる諸先生が各方面から赴任して来ました。

私の入学当時の校長は幣原坦先生で1年後韓国統監府の学務局長として京城に赴任しました。先生は授業中、ロンドン在勤の弟、喜重郎（後の総理大臣）の自慢話をした事を思い出します。

幣原先生の後任は相模の旧家出の大島正健先生で、札幌農学校の創立者米国人ウィリアム・クラーク博士の薫陶を受けた敬虔なるクリスチャンの教育者でした。先生は興にのるとシェークスピアのマーク・アントニーのシーザーの追悼の詞を朗読し、我々生徒に深い感銘を与えました。先生は教室に於ては宗教的な話は一切されませんでした。私が米国留学に際し挨拶に伺った処、先生は「笠井君、君はこれから故国を離れて1人異郷に留学するのだから、孤独におそわれたり、困難に苦しむ事もあるが、天の父なる神が常にあなたと共にいます事を思い、祈りながら心強く生きなさい」と申されました。

教師には物理科学の福島出身の菊池留五郎先生、漢文は岡山の香川香南先生、私はこの先生の影響により漢詩に興味をもち、渡米の際、作詩眼1冊を携えて母国憶い出のよすがとしました。

体操は四国の退役陸軍大尉加藤五郎先生が当り、厳しい訓練と共に武士道精神を吹き込まれ、その精神的感化は多大でありました。

英語は島根の杉本栄一郎先生、物応虎之助先生、小泉先生が担当され、杉本先生よりはベンジャミン・フランクリンの自叙伝を学びました。後年、私はフィラデルフィアの独立閣を訪れた時、フランクリンの墓前に花を捧げて当時を偲びました。物応先生は英会話を指導し、小泉先生は下級生の英語を担当し、私が「little（リットル）」という字の質問をすると、リットルというのはお前のようなチビの事を云うのだと冷笑され、多いに憤慨したことを忘れません。

私は明治19年7月14日、南巨摩郡西島村（現、中富町西島）、笠井兵吉の長男として誕生し、水戸の藤田東湖一族の川上俊先生（西島小学校校長）に依って重治と命名されました。明治32年西島尋常小学校卒業の時は13歳で、中学受験資格

笠井重治

明治36年卒

「甲府中学校創立100年記念に際して」（昭和55年6月）から抜粋

の年令に達していなかったのを、広弾院住職曹洞宗甲府中学林教諭、越賀悦翁先生の願書作成により受験し、合格したのです。従って学年中最年少であり、体格も小さかったのでチビと言われたのです。

当時1年上級に石橋湛山（後の総理大臣）、同級に後の文学者、中村将為（星湖）がいました。

〈 中 略 〉

さて、甲府中学100年の歴史の中には多数の優秀なる卒業生を社会に送り出し、今日各界に於て同窓生諸氏が活躍されておることは誠に慶賀にたえません。今夕御出席の在京同窓会会長の水上達三氏は大正9年、私が帰朝翌年中学校の招聘にて講演せし時、在校生であったそうですが、水上氏は日本貿易会会長として実業界に雄飛せられ国内は勿論、海外にまで多方面に亘り大きな足跡を残されている事は衆知の通りでありまして、殊に最近是美国インディアナ州アーラム大学より名誉法学博士の称号を授与され又、日仏通商関係にて仏蘭西政府より、叙勲せられる等数々の栄誉を坦われ心から祝意を表する次第であります。

昭和40年私は多年の日米親善に貢献した功績を認められ、勲2等に叙せられ瑞宝賞を拝受しました。95歳の今日も日米文化振興会の会長として親善のために一層の努力をいたしております。

我が国は戦後、米国の援助と国民の努力により一応経済的に立ち直ったとは云え、現状は中央地方を通じ、政治は倫理性を失い真に国民のための政治は行われず、国民の政治離れを招来し愛国的精神は失われつゝある事を痛嘆いたします。

私は、この現状を深く認識、痛感して青壮年の愛国的精神を喚起し、我が国の将来の発展に努めねばならぬと思います。

終りに私の拙い漢詩を披露して母校の創立100年を祝し、同窓生諸君の御健闘を祈ります。

富嶽麗峰聳千秋（富嶽ノ麗峰、千秋ニ聳エ）

富川清流洗心魂（富川ノ清流、心魂ヲ洗イ）

機山雄図柳莊忠（機山（武田信玄ノ号）ノ雄図、柳莊（山県大二ノ号）ノ忠）

請見甲州男子膽（請ウ見ヨ、甲州男子ノ膽）

石 橋 湛 山

「三人の校長」他から

石橋湛山

明治35年卒

「湛山回想」（『石橋湛山全集』15所収）より抜粋

中学で2度落第

私が中学に入学したのは、前に記したとおり明治28年であったが、そのころ、山梨県には、ただ1つ、甲府市に県立中学校があっただけであった。そのほかには、県立の師範学校が1つ、やはり甲府市にあった。この2つよりも上級の学校はなかった。だから中学の生徒は大いに持てたもので、羽ぶりをきかせていた。毎年11月3日には運動会があって、全市の子女が着飾って、見物に来た。

中学には入学試験があった。鏡中条村小学校からも、その何人かが試験を受けたが、どうしたはずみか、高等小学2年を修了しただけの私ひとりが入学した。他の生徒は高等4年の修了生だったが落ちた。

〈 中 略 〉

ところが私は、中学に入学してから、また、はなはだ悪童ぶりを発揮した。どういう事情であったか、一時、甲府市におらず、他にも仲間があつて、鏡中条村から2里半の道を歩いて通学したことがあつたが、その往復の間の買い食いに、月謝を使い込んでしまったようなこともあつた。落第も、また2度までした。

落第の1度は1年の折で、これは中学での勉強の方法を全く知らず、小学校におけると同様、予習も復習もせずに、ぼんやり過ごしたからであつた。2度目は、たぶん4年の時だったと思うが、なまけて遊び歩いて、勉強をしなかったからである。少しく勉強すれば、すぐに成績は、3、4番の席次をうるぐらいまでに上るのだが、それを私は、はなはだ怠った。私は省みるに、生来のなまけ者であるようだ。

〈 中 略 〉

3人の校長

私が甲府中学に入学した時の校長は、文学士の黒川雲登氏であつた。黒の小倉の詰めえりの洋服を着ている、まじめな教育者のようであつた。しかるに、どういうわけか、校風が乱れ、生徒のストライキが、しばしば起つた。もつとも校舎も、まだ仮校舎で、錦町という所にあつた。そういうことも、生徒の心をすさませたかも知れない。当時4年か、5年の上級生で、ストライキの指導をした生徒の中には、後に通信大臣になった田辺治通君もいたかと思う。田辺君は、東京の帝大を卒業すると、すぐ通信省の官吏になったのである。

黒川校長は、そんなことで、私が2度目の1年か、あるいは2年のころにやめた。その後、一時、県の学務課長の伊沢多喜男氏が校長代理をつとめたが、やがて、これも文学士の幣原坦氏が着任した。伊沢氏は後に枢密顧問官にもなり、政界に暗躍した手腕家であつたが、幣原校長は、この伊沢氏が、とくに選んで、招いたのだと、終戦後枢密院で伊沢氏に会った際、私に話していた。そのころ幣原先生も枢密顧問官であつた。

幣原校長は、まだ健在で、大阪に住んでられるが、日露戦争の前後には朝鮮の統監府に招かれて、韓国の教育制度の建設に尽力し、また広島高師の校長、台北大学の総長等を歴任して、それぞれ功績をあげた人だけに、乱れた甲府中学をも見事に建て直した。当時同氏は、まだ27歳かの青年であつた。校舎も、幣原校長の時代に、甲府城内に新築された。なお幣原校長は、故幣原喜重郎氏の令兄である。

しかるに幣原校長は、右にも記したごとく、明治34年の春であつたと思うが、朝鮮に行かれることになり、代って農学士の大島正健氏が来られた。

大島校長は、札幌農学校の第1回の卒業生で、有名なウィリアム・クラーク博士の直接の薫陶を受けた人であつた。同氏は神奈川県生まれであつたが、札幌農学校卒業後、しばらく母校にとどまり、英語を教えた。その際学生中にズウズウ弁の者があつて、発音を教えるのに苦心した経験から、音韻学という珍しい学

問の研究に志し、後年それによって文学博士の学位も得たという学者であった。また札幌で、初めて教会を作り、その牧師を勤めたという、熱心なキリスト教徒でもあった。しかし同時に、からだこそ小さかったが、物にこだわらず、意気の盛んな、豪傑はだの人であった。思うに、これらの性格も、1つは大いにクラーク博士の感化によったものであったろう。

私は、この大島校長から、しばしばクラーク博士の話を聞いた。そして私の一生を支配する影響を受けたのである。

〈 中 略 〉

私は幸いに大島校長に会うことにより、クラーク博士の話を聞き、なるほど真の教師とは、かくあるものかと感動した。

私は生来、宗教家になるべきはずの境遇に育ったものである。もともと、父も、望月師匠も、寺に成長したものは、必ず坊主になるべきだなどという窮屈な考えを持った人ではなかった。父は、よく、正しい人になれとはいったが、職業を何にせよなどとは、1度も口にすることはなかった。しかし私は、おのずから周囲の感化を受けて、何かしら宗教家的、あるいは教育者の職業を選ぶ方向に進んでいた。私が中学に入学したのは、日清戦争の直後であって、軍人は少年の尊敬的であった。がんぜない子供に、おまえは何になると聞くと、大将になるんだと答える者の多かったことは、明治から、あるいは大正にかけてでも、日本一般の風潮ではなかったかと思う。しかし私は、かつて1度も軍人になりたいなどという野心をいだいたことはなかった。はっきりした目的にまで、まとまっていたとはいいい得ないにしても、意識の底に、常に宗教家的、教育者の志望の潜んでいたことは明らかであった。そこに私は、大島校長を通じ、クラーク博士のことを知り、これだと、強く感じたのである。つまり私もクラーク博士になりたいと思ったのである。私は今でも書斎にはクラーク博士の写真を掲げている。

うぬぼれ

ところが、この大島校長には、もし私が中学を順調に5年で卒業していたらいうまでもなく、6年で卒業しても会えなかったのである。校長は、私が5年生になるまぎわに着任したのであったからである。なまけて2度落第したことが、この幸いをもたらした。だから、なまけるのが良いというわけではないが、人生には、どこに、どんな偶然があるかわからぬという感を強く受けるのである。

〈 中 略 〉

明治35年、私が中学を卒業し、東京に出ようとする時、香川氏は、その自宅で私のため祝杯をあげ、次の送別の詩を半折に書いてくれた。

愛弟湛山生 心気最雋雅

四海一子由 我於君是也

また、ある時（たぶん先生が東京に移られてからであったが）お尋ねすると、たまたま大阪の河上謹一氏から、同氏自作の詩を半折にしたためたものが来ておって、ほしければやろうといわれたので、もらって来た。河上氏は、今の日本輸出銀行総裁河上弘一氏の厳父で、明治の初期、日本銀行理事として鳴らし、その後、また住友の総理事として、大阪財界に君臨した有名人である。その詩は、こうである。

兵馬相摩魏与呉 揮將巴蜀委馳驅

若遣諸葛夢榮達 誰画草廬三顧図

この2幅は、今でも大切に保存し、おりおり壁間に掲げて、往時をしのんでいるが、河上氏の「若し諸葛をして榮達を夢みしめば、誰れか画かん、草廬三顧の図」という2句は、また私の座右の銘である。香川氏も、また、そんな含みで、私に、この書を持って行けといったのかもしれない。

すでに私が東洋経済新報社にはいつてからであった。いわゆる飛ばず、鳴かずで、しばらく勉強するつもりだと、私がいったのに対して、先生は、しかし『論語』に「之を^う汚らんかな、之を^{あたい}汚らんかな、我は賈を待つ者也」とあることも、また味わうべきだと教えられた。これは子貢が、美玉ここにあり、つつみて、これをひつにおさめんやと尋ねた折に、孔子が答えた言である。

大正11、2年ごろ、私が心臓に神経性の結滞があるので悩んでいた時、先生は、古語に、病を養うは、病を忘るるにあり、とあると、見舞いの手紙をよこされた。これは、私に、大いに役に立った。

私が酒を飲むようになったのも、香川氏の感化によるところがあったかと思うが、先生には、漢学者からでなくては得られぬ、いろいろの良い教えを受けた。

望 月 春 江

「なつかしい甲府一高」

わが甲府一高が本年創立96周年を迎えいよいよ隆盛に向かいつつあることは誠に喜びにたえないところである。私の入学したのは明治41年春で今から70年前になる。お城をとり巻く堀にかかった黒塗りの欄干橋を渡って2本の白筋の帽子、しかも耳でようやくひっかかって止まるような帽子で意気揚々とこれまた黒塗りの校門をくぐったものである。学校の敷地は舞鶴城跡の一部だったので、土地がこまかく上下左右に出入りして石垣が各所に残っており趣深い別天地の心地がした。校庭の奥に何やら寄宿舎があるらしく、その時は人影も見えずタブーの気分につつまれているようで近寄れなかった。淡紅色の杏の花と青白い李の花がさみしく咲いているのが眼に入った。こんなところで日を浴びながらあてもなく思いにふけてみたらとしきりに心ひかれたが、ついに卒業して去っていく日が来てもそこから先一步も近寄ることもなく過ぎてしまった。この学校の外からの風致は夏に堀をうずめる蓮花であるが、何といっても秋深く石垣を飾って綴る蔦葛の錦のつややかさである。霜枯れの哀愁も印象深い。ああした遺跡がきえていくことは何とも遺憾の至りである。どうしてあれを県のためにもものこさなかったのだろうか。つい批判したくなってくる。

当時母校は名も高い大島正健先生を校長に頂き、北海道大学のクラーク博士の薫陶を親しくうけられた明るく大きな人柄が校風に反映して春風駘蕩たるものがあつた。教頭として光をはなっておられた杉本先生、先生の基礎英語には恐れを

望月春江

大正2年卒

『花をみつめて』所収の「なつかしい甲府一高」全文

なすほどのこわさがあつたが、当時の高等学校へ入ってからほんとうにたすかったと皆感謝しているという。また物理の宮、博物の菊地両教諭は共にその分野における名だたる教育家で、体操の加藤大尉は西南戦争に従軍された勇士で皆こわがっているながらも心服していたという。われわれ生徒などにはもったいないようなえらい漢学者の中山教諭、イングランドのそれこそ本物の英会話のマンロー先生、神様のように通訳のうまいモノオウ先生などと普通の学校では到底望めないほどの立派な先生揃いであつた。したがってその生徒が皆優秀であるばかりでなく、中央へ進出していたので、あとからつづく生徒はそのまま鼻高々といったところで我々にはありがたい次第だつた。俗ばなれして個性をもつて力強い内容を発表される若い小林先生の国語は忘れられないすばらしさをもっていた。そこへ加えて、星の研究家のスマートな江戸っ子の青年英文学者の野尻抱影先生を迎えるや、清新な文学熱が澎湃として起こつて将来を約束するような生徒が踵を接してあらわれ出したが、残念なことにわずかな間につぎつぎと夭折してしまつた。

現在学校の行事にはどんなものがあるのか知らないが、当時をふり返ってみるのもおもしろい。全校生徒の運動会・学術総会、それは生徒の講談・琵琶・手品・詩吟・尺八などであつたのしい命の洗濯の日であつた。また年に1、2回の外部からの有益な講演会、これはその新知識がうれしかった。上級生になると田んぼや山すそで行なう発火演習といつて戦争のまねごとをやる。形だけの木の銃とは違って軍隊からの払い下げの実物なのでわれわれの興味はひとしおであつた。それからこれは今でも忘れられないがよいお天気の日のお土曜をえらんで急に生徒のほうから願い出る遠足会である。春秋の年2回は必ず実行されるようだったが早朝始業時に先立って生徒は申し合わせたように控室に集まつて一斉に拍手すると5年と4年の級長が大きな下駄箱の上に立つて遠足を宣する。2人の代表は教官室に直行して願い出る。先生のほうも喜んで賛成される。こういった慣例は誠にうまいことで今日でも実行されていたら楽しいものと考え。ふり返つてあの頃の5年間をつくづくと反省吟味してみると生涯の最も大切な時期にあたつてその基礎となるべき学問と世渡りの道との勉強に専念させてくれたのは実際時宜を得たものと大変ありがたく思う。あたかも当時は男女交際のごときも今日から見ると必要以上に厳格であつたようだったが、幸い生徒もたいしてわずらわしい事件も起こさず過ぎてきたところを見るとあれでよかったと思う。甲府一高を卒業して上京、美術学校へ入学して間もない春の日、教室で花の写生をしていた私はちょっと退屈したので窓から顔を出して下を見ると、ちょうど雉子が長い尾をひいて「ケンケン」と一声高く叫びながら校庭の熊笹の中から飛びたつてすぐつぎの叢の中へ消えた。近くで長い袂のういういしい娘のモデルがひとり何か探している様子、上から「何しているの?」「いい香りがするのでよくみたらこんな董がみつかったの、紫色が美しいでしょう」「ここまで匂ってくるようだ。その着物かわいいね」「ありがとう、ここは日が当たつてとても暖かいわ」これは窓の上下での応答のひとつである。甲府一高の時の厳粛さとこの柔らかな雰囲気とは何と烈しい違いであろう。専門の道に進み入るものとまだもっぱら修業の途上にあるものとの違いだとすればどちらもこれでよろしいと思う。ただここに問題に

なるのはあれだけ選ばれた先生方を迎えておりながら果たして生徒のほうはこれにこたえて日々真剣な勉強がなされていたかどうかということになるとそこは心細い気がしないでもない。すべてはこれを受けとめる当方の心構えに帰するのである。受けとめる心の用意と努力との有無にあるのでどこまでも師の教えはヒントを与えるのにとどまるといえる。私は人一倍山梨の自然が好きで、山を愛し花を愛し鳥を愛してきた。制作にあたってはそこから画材は生まれてくるように思っている。そして何よりもまして力づく私の絵心を励ましてくれる源は、何といてもあの温かい美しい同窓生の友情であった。人も羨ましがれるほどのあの友情そのものであったことを思う。

最後に私は同窓の諸賢の御多幸と果てしない御発展とをいのるとともに私の鯉の絵に対する御礼を一言申しのべさせていただきたいと思う。それは久々に会う方々から私の魂こめた講堂の鯉の絵は今も眼の底に深く刻まれているとのなつかしいお言葉をいつもいただくことに対してである。

渡 邊 大 藏

1 本の日章旗 ー軍神三枝直海軍少尉ー

敗戦後の混乱がおさまりにかけていた或る日ふらりと入った百貨店で今次大戦々没将兵の遺品展が開かれていた。その会場正面に掲げられた1本の日章旗を見た途端、呆然としてしばらくは立ちすくすのみであった。その旗には当時の甲府中学校の多くの教師名にまじって私の名前も記されていた。それは正8位勲6等功4級三枝直海軍少尉の予科練入隊時の寄せ書であった。

佇立して凝視するうち当時の思い出が甦ってきた。新米教師として勤めていた昭和18年初冬の校庭での出来事である。強い西風の中、全校生徒が整列する最前列に海軍甲種飛行予科練習生入隊予定者が並ぶ。何時もの集会とは違う厳粛な壮行会である。「親よりも先に死ぬ程の不幸はない」と涙した時の大野芳麿校長の重厚な姿と、入隊者代表として挨拶に立ち、祖国を救わんとする一途な決意を述べた三枝直君の姿であった。

昭和18年と言えばアッツ島の玉砕、ミッドウェー海戦等で敗色が濃くなりつつあった。したがって将兵の損傷も多くその補充策として若い生徒から海軍の場合所謂予科練生の募集が行われた。陸士、海兵とは異なり短期間の教育で直ちに実戦に就くといった即戦力の養成機関であり、中学3年以上であれば誰でも応募出来た。

三枝君は学業成績優秀で中学校入学後もずっと級長、副級長を通し続けた。従って洋々たる前途、豊かな将来は誰の目にも明かだった。にもかかわらず当時の組監督（現在のHR担任）の先生の海兵へのすゝめをも断わり、今祖国を救うためには予科練しかないとの固い決意のもと志願された。

私は昭和19年晩春山梨工専に転勤になり授業に追われるまま三枝君の事は忘れてかけていた。昭和19年・20年となると戦局は益々急を告げ、本土空襲も本格化し

渡邊大藏

昭和8年卒

「1本の日章旗ー軍神三枝直海軍少尉」は本記念誌のための寄稿

た。昭和20年3月24日午後3時、軍艦マーチ入りのラジオ放送、および号外で、1月12日午前5時、特殊潜航艇人間魚雷回天がシドニー湾に突込み敵艦多数を轟沈して大きな戦果をあげた旨の発表があった。(後になって実際にはグアム島のアブラ湾であったと知った。)その乗組員の中に海軍2等飛行兵曹三枝直君の名前があった。回天は乗り物自体が魚雷であり、万が一にも生還は不能、文字通り身を捨てての攻撃であった。三枝君は血書をもって回天乗務を志願されたと聞いている。紅顔わずか19才前途有為の身を、遠く南太平洋グアム島アブラ湾に祖国日本に捧げ、花と散られた三枝直君の霊の安からんことを只管に祈るのみである。後に4階級特進の海軍少尉に任ぜられた。

半世紀を過ぎた今、本校120周年記念誌発行にあたり、若い同窓生諸君に、このような先輩の存在を知っていただきたく秃筆をとった次第です。

後記

軍神 楠公 殉国神潮院殿金剛誠忠直心大居士

正8位勲6等功4級三枝直海軍少尉

略歴

昭和18年10月甲府中学校5年の初冬、第13期海軍飛行予科練習生志願合格、同年12月1日三重海軍航空隊入隊、19年5月土浦海軍航空隊転属、同年8月1日同航空隊甲種飛行予科練習生卒業、兵長進級、卒業成績優秀に付教育主任賞受賞、同年9月血書を添えて特殊潜航艇回天乗組志願、同年12月山口県徳山湾大津島基地にて訓練終了、海軍2等飛行兵曹進級、同年12月29日七生報国、武神三枝直の肩掛をかけて神戸湊川神社に参拝、同年12月30日神潮特別攻撃隊金剛隊員(隊長加賀谷大尉以下19名)としてイ58潜水艦に搭乗大津島基地出港、昭和20年1月12日潜水艦より発進出撃グアム島アブラ湾に突入午前5時敵艦に体当り攻撃、戦死。特旨により4階級特進海軍少尉に進級、功4級金鷄勲賞を賜る。

神霊は故郷東八代郡一宮町市之蔵の御実家に神静っておられる。

三枝直海軍少尉遺詠

南みのおおわたつみにつづくなるすめらみいくさにわれは出てなむ

空翔ける鳥は屍を残さずと航空兵の母はなげかず

すめぐにの仇碎かずば何をなしなにを学ばむ大和男の子は

(故人と同級生の倉田和男君よりお貸しいただいた「三枝楠公」より抜粋。心からなる謝意を表します)

金 丸 邁

「鎮魂の50回忌」から

8月23日に公布された「学徒勤労令」によって、1、2年生をのぞいた上級生達は軍需工場への勤労働員に狩り出されていった。

ちなみに、この上級生の中に作家の故・竹中労氏がいた。竹中氏は、終戦直後

の甲府中学、同盟休校のストライキを指揮し、当時の校長以下、勤労働員中、生徒に暴力行為を行った先生方を追放したという事件があった。

その間の心境を竹中氏は著書「無頼の墓碑銘」(KKベストセラーズ・1991年)の中で語っている。

その頃になると、甲府中学には東京より陸軍大学校が疎開して来るようになった。

校舎のほとんどが陸大の接収するところになり、自然、我々生徒は片隅に追いやられるかたちになった。

当時の陸大校長は賀陽恒憲王中将宮殿下であり、殿下の御子息も一緒に疎開転校されて、我々と一緒に勉学されるということで、先生方の緊張度合は上昇するばかりで、生徒の我々が、はたで見えていてもいじらしかった。

〈 中 略 〉

中将の将旗をつけた宮様の専用車は、今迄我々が見たこともない豪華な素晴らしいアメリカ車であった。きっと、シンガポールかマニラあたりから捕獲してきた車であろう。

私達が車に近付いて見ようとすると、憲兵が素っとなで来て、私達を犬猫のごとく蹴散らした。

「陸大金庫誘閉事件」

今もって、甲府一高昭和25年卒業同窓生によって語りつがれている当時の事件である。

それは陸大がまだ本格的に疎開して来ない時期の事件であった。

疎開の受入れ準備のため先導隊として曹長を長として1分隊あまりの兵がやって来た。

続いて、陸大の什器類の机や椅子、立派な応接間セット、書棚などが陸続として東京より送られて来た。

その什器の中に、特別製の機密書類を入れる大きな耐火金庫があった。

そんなある日、昼休みの休憩時間中、5、6人の生徒が、かくれんぼをして遊んでいた。その中のS君とT君が、陸大の什器類の置かれている教室にまぎれ込み、たまたま扉が開いていたこの金庫の中にかくれ様として中へ入った。中学1年生の生徒が充分2人入れる大きさの金庫であった。

次の瞬間、ガタンと重い音がして重い金庫の扉が閉まってしまった。

2人の後を追ってきた生徒のA君が、それを見ていたのが不幸中の幸であった。

中からS君とT君が開けようとしても開けられない金庫であり、追って来たA君が引っぱってもびくともしない、扉の回転ダイヤル鍵が閉まる瞬間廻ってしまったのである。

この重大さをさとしたA君は、直ちに担任の先生にこのことを告げた。

担任の先生はびっくりして現場にとんで来る。騒ぎをききつけて校長や先遣隊の曹長も駆け付けて来たが、曹長は鍵のダイヤル番号を知らないという。

幸い、この教室には東京の陸大との直通電話がすでに仮設されていたので、電話にとびついた曹長は、斯々然々と状況を説明しダイヤル番号をお教え願いたい

むね伝えたが、生憎、東京の陸大にはダイヤル番号を知っている将校が不在であった。

校長始め先生方の表情は真っ青になり、金庫の中の2人にドアを叩いて、がんばれの声をかけるが、2人の応答の声はだんだん弱々しくなっていく。

急拠、S君、T君の両親も学校の連絡で駆けつけて来た。

何回も、何回も東京への電話連絡はとられたが、先方の対応は冷やかで、生徒が金庫に入る様な状況は学校の監督不行届であり、生徒の1人や2人死んでもかまわないと言った調子であった。

曹長の表情も血の気がなくなり、それこそ電話に向かって最敬礼のかたちで、早くダイヤル番号を知っている将校を探し出してお教え願いたいと頼むのみであった。

時間は刻々と過ぎていく。

金庫の中の2人の声もとぎれがちであった。

校長も先生方の表情も、もうこれまでという覚悟の顔に変わった。

もう、ことの発端より1時間以上を過ぎていた。

その時、東京よりの電話が鳴った。

受話器にとびつく曹長。

「メモ、メモ」

その声はうわずっていた。

先生の1人が持っていたノートを破って、鉛筆と一緒に渡す。

メモをとる曹長の手もとは激しく震えていた。

「あ、ありがとうございました」

東京の先方がやっと番号を教えてくれたのだ。

受話器を置くと、はじける様にとびのいて金庫に駆け寄る曹長、ダイヤルに手をのばし、メモを見ながら、一つ一つ慎重にダイヤルを廻す。

そこに居合わせた、校長、先生方、ご両親、そして、授業を中断して駆けつけた我々生徒全員の視線が、曹長の指先の一点に集中する。

正に息をのむ様な次ぎの瞬間、カタンと軽い音がして、ダイヤルが合った。

思い切り扉を引っばる曹長。

開いた。

金庫の中から転がり出て来るS君とT君。

ふわーッと、全員のため息がこの場を大きく包んだ。

曹長の瞳には涙が宿っていた。

この曹長は、恐らく先導隊の責任者として管理不行届きでなんらかの処分を受けたと思われるが、この時期を境として我々1年生も勤労働員に狩り出されたので、そのあたりの、くわしい事情は知るすべもなかった。

三井伸夫

「生物部で活躍した高校時代」他から

ああ終戦 一戦時下、敗戦直後の思い出

〈 中 略 〉

この頃には、本校は一部を残して焼失していたため何方所かに分散していたが私は県立甲府中学柏村分校に通学していた。家から12キロも歩いてやっと学校につく毎日だ。友人の三輪勤君（現県立山梨中央病院内科医長）と登校するのだが、石和駅へ行く途中に笛吹川の廃河川を利用した小松農場を通る。

農業修業道場という大農場であった。この農場の中にひかれた農道を通るのだが、たわわに実をつけたブドウ、桃、柿の木が道路に枝をのばしている。三輪勤君と私は、その誘惑に負けついフラフラと果実に手をつけ農場主（中学の先輩）につかまってしまったことがある。

20年8月15日。わが国はついに敗れた。この日、私は八代郡内の生徒を集めた柏村分校で農作業をしながら玉音放送を聞かされた。

「朕深ク世界ノ大勢ト帝国ノ現状トニ鑑ミ非常ノ措置ヲ以テ時局ヲ收拾セムト欲シ茲ニ忠良ナル爾臣民ニ告ク……」

放送は非常に聞きとれにくく、日本が無条件降伏をしたと知ったのは放送が終わった後のことだ。だが、私は敗戦の事実を知ってから、敗けたという実感は不思議となかった。

その放送が終わった後のことだ。先生が明日はわれわれでつくった「ジャガイモ」を分ける、という。

「袋を持って明日は登校するように」と。そこで翌日、大きな袋を持ち喜びいさんで分校に行ったところ、1人分の配給がなんと小さなジャガイモ2、3個であった。

秋には汗にまみれてなれぬ農作業に毎日を過した分校を引き上げ、再び甲府まで通学することとなった。

〈 中 略 〉

戦災にも焼け残った甲府中学の講堂に甲府高等女学校（現甲府第二高等学校）が引越してきもした。講堂を簡易間仕切りで仕切り、クラスを分け勉強していたと記憶している。校舎の窓ガラスはほとんどが破れていた。1年後には学制改革で六・三制が実施され2、3学年だけの甲府第一高等学校併設中学となる。

生物部で活躍した高校時代 一甲府第一高等学校に入学一

〈 中 略 〉

23年という年は私にとっても大変思い出深い。この年、甲府第一高等学校に無事、入学する。

といっても中学時代と、とくに学舎が変わったわけではない。甲府一高の併設中学に学んだ私にとっては、いうなれば通い慣れた校舎であった。それに入学式もなかったと思う。

三井伸夫

昭和26年卒

『救急医「わが履歴書。」より
抜粋

高校生となった私は、柔道をはじめた。当時、剣道の組織だった活動は、GHQの手でまだ禁止されていた。そこで剣道に代わるスポーツをと、柔道を選んだというわけだ。柔道も学校ではまだ許されず、稽古は夜、甲府警察署の道場でおこなう。当時、学校の書道教師（元甲府中学柔道教師）浅川源澄先生が、警察で柔道を教えていたところから通うようになった。

一方、中学時代の寄生虫研究会を母体とした生物部も学内に誕生する。1年先輩の辻守庸さん、伊藤和夫さんと私の生物好きのメンバーが集まってつくった中学のクラブが、格上げされて正式な「部」になったといったほうが正しいであろう。辻さんは元台北帝大教授の息子、伊藤さんは甲府一高教頭の子どももあった。

中学時代のクラブ・寄生虫研究会では、もちろん、寄生虫の研究を基礎からやろうということで話が決まった。辻さんの父親がそのほうの専門家であり、しかも駐留軍の寄生虫列車が甲府駅に常駐していたのが大きな理由だ。

当時、日本住血吸虫による人的被害は、千葉、広島、それに山梨が1番大きかった。宮入員により媒介されるこの寄生虫は、人間の体に入ると門脈に寄生し肝臓障害・肝硬変を起こし、全身土色となり腹部膨満をきたす地方病である。しかも山梨は他の種類をも含めた寄生虫のメッカだ。

日本住血吸虫の媒介を含めた中間宿主・宮入員の生態を研究目的として寄生虫列車が、甲府駅に常駐したのもそれだけ日本住血吸虫の被害が多い地域であった証左であろう。

話が少々それたが、発足した生物部は手始めに、豚の回虫の卵の人工孵化などを試みた。人間に寄生する回虫と生態がよく似ているからだ。また、夏休みには田舎の小学校を訪れ、学童の検便をする。おかげで当時の私のあだ名は「うんこ屋さん」。

ちなみに、生物部をつくった先輩の辻さんは広島大学医学部寄生虫学教授、伊藤さんは福岡の第一薬科大学放射薬品学教室の教授として、1年後輩の大野真介君は金沢大学医学部癌研究所で今日活躍しているという。

山 村 正 光

「君島を憶う」から

君とは一緒に山行を共にしたのは数える程しかない。私たちが昭和27年6月、小さな山の会を組織した。それは、南アルプスの山々の写真を撮ろうという目的だった。

当時君は、甲府一高に在学し、たしか写真部に籍をおいていたはずだ。先輩に、向山良彦（甲府駅前ムコヤマカメラ店々主）、早川清（学研勤務、君がフランスに行っているとき、彼はキリマンジャロに行っていた）がおり、同級生に、古屋丘夫、上矢隆二、菊島正徳がおり、元三日町の田中義元氏（JAC会員、当時、山梨報道写真協会常務理事）を指導者として、学校の行きかえりに同氏のところに

山村正光

昭和20年卒
「君島を憶う」（『白嶺に生きる』
所収）から引用
君島久登は昭和30年卒

集っていた。私は、その時英和学院勤務の中村司先生などと、山の写真のことでやはり田中氏の所に出入りし、君たちと接触していたわけだ。

昭和27年5月に、田中氏と君と3人で鳳凰三山に遊び、君が南御室小舎付近で薪取り中に、ナタを紛失し、ショゲかえっていたのを覚えている。この頃から君は本格的に山登りにうちこむようになった。

その当時、田中氏が元三日町の子供クラブの面倒をみていたが、君は若いのに似ず、子供たちと一緒によく遊び、人気の的であった。また、子供クラブのクリスマスにはサンタクロースに化けて、やんやの喝采を受けたり、家で使っていた卓球台をかついで来て、田中氏の庭でピンポンに興じ、なかなかよいお兄ちゃんであった。

思い出が脱線するが、私の山日記によると、昭和29年3月30日から4月3日にかけて、これまた戸台から仙丈岳、駒ヶ岳に入っている。この山行はどういうわけかよく思いだせないが、戸台まで途中から営林署のトロッコに便乗したこと。戸台川の右岸にあった、石灰石を焼く塔みたいな炉の中でビバークしたこと。仙丈岳の下りで雨となり、翌日1日北沢小舎に沈没したこと。また甲斐駒ヶ岳から横手におりる途中、刀利天狗あたりの森林帯でくさった雪で難儀したことなどが思いだされるのみである。

私共の会の記録によると、君は昭和29年に入会し、32年に退会している。33年の議事録によると、“君島君の件”とあり会費未納による自然退会となっている。考えてみれば、君はそのころ大学山岳部の現役で我々のような地方のチャチなクラブのことなどかまっておれなかった人だから無理もない。

昭和30年の7月、私たちは、白峯の大樺沢、吊尾根北東尾根を探るべく、青木鉱泉、高嶺を経て、野呂川におりたった。大樺沢の出合、千石島にベースキャンプを設けた。7月24日、午後から雨となった。夕刻、赤なぎ沢を経て、君が甲府一高山岳部をひきつれて下りて来て、やはり千石島にテントを張った。早速、君が来て、“実はお土産をすこしばかり持って来たんだ”と白い歯を出して大きく笑った。何だろう？どうせ、君島のことだ。相当のものを持って来たにちがいない。背負子から“お中元”とのし紙を張ったビール半ダース入りのカートンボックスであった。今とちがってカンビールなどない時代である。また広河原に入るのに2、3日かかっているのだ。夢のような感激。酒豪、深沢好文リーダー、象のような眼をいよいよ細めて、大きく火の子をまき上げて、7人で山の幸いを祈り、何回か乾杯した。

中 沢 新 一

「ピューリファイ」から

私は三枝茂雄先生と、言葉をかかわしたこともなかった。通っていた高校で、何度かお見かけしただけである。それなのに、三枝先生は、私の心に深い痕跡を残

中沢新一

昭和44年卒

『三枝茂雄展』所収の「ピューリファイ」から前半部を転載

三枝茂雄は昭和13年卒

している。不思議なことがあるものだ。知り合いでもない、話をしたこともない、それなのに先生の存在の記憶は、私が「芸術」とか「人生」という言葉の意味を考えようとするたびごとに、鋭い閃光のように、私の中によみがえってくるのだ。そんなことがありうるのだろうか。しかし、三枝先生という存在の記憶は、いまでも私にとって、確かに大きな意味を持っている。

はじめて三枝先生の姿をお見かけしたのは、高校に入って間もない頃の、昼下がりがだった。私たちの教室は、古い木造の校舎の西の端にあり、さらにその奥のほうに、絵の具に汚れ、石膏の像が雑然と放置されている、美術室が接続していた。美術室には、普通の教室や理科室や音楽室にはないような、奇妙に大人びた空気がただよっていた。

その美術室には、放課後になると美術部の若者たちが、出入りしていた。彼らは、その頃の私が所属していたような少年たちとは、少しタイプが違っていった。少年たちにとっては、この高校の生徒であるということは、将来の社会的な成功につながる、確実な階段のステップに足をかけていることを意味していた。そこでは競争が、あたりまえで、それ以外の価値に没頭する者は、それだけで変わり者とみなされた。少年たちはみな単純で明るく、子供っぽく、政治的には激しい時代であったにもかかわらず、彼らの多くはまだ、政治的にはまったく無垢だった。

ところが、美術部の若者たちは、みずから望んで、早くも老け込んでしまおうと、努力しているかのように見えた。ほかの少年たちが、何の疑いをいなくともなく、したがおうとしている価値に対しては、もはや何の信頼もおいていない、というだけの成熟ぶりを見せ、かといって、政治的なイデオロギーに夢中になれるほど、楽天的でもなかった。彼らはまだ若いのに、苦行して、世の中で認められている、あらゆる価値から、自由であろうとしているように見えた。その美術部の若者たちの中心に、私は三枝先生という存在を、発見したのである。

午後の授業がはじまって、私たち少年たちが、すでに席について、教師が入ってくるのを待っているとき、その外の廊下を、三枝先生は2人の美術部の若者に肩にすがるようにして、西の奥の美術室に、引きずられていった。ひと目で、泥酔しているのがわかった。しかし、私にはその泥酔ぶりが、ふつうの酔っぱらいのものでないことが、すぐにわかった。美術室にひきずられていく、その姿を見たとき、不思議なことだが、私は風を連想した。地上を支配しているのとはちがう、上空の風にあおられるのを楽しみながら、風は、自分のことを尊敬している若者たちの、弱々しい風糸を頼りに、空を舞っているのだ。

その頃、私は漢詩に夢中になっていたもので、こんな連想をしたのである。中国では、仙人は風のように、空を舞うことを理想としている。地上を支配している力のすべてから、離脱をとげ、いっさいの弁証法からも自由に、空に舞い上がる。そのとき、仙人は自分の中に抱えこまれた、宇宙と同じくらいに深い、魂の深淵を、地上に捨ててきたりはしないのである。魂の深淵は、大地に吸い込まれていくかわりに、その世界では、風ともども、大空高く飛翔をとげるのだ、空に舞い上がった、魂の深淵。いたずらに深くまた暗くあることを拒絶した、真実の深淵が、廊下をひきずられていく、私にはそう感じられた。

それから、間もなく、高校では試験が始まった。そのとき、私ははじめて三枝先生を、間近で見た。先生は漢詩の監督にやってきた。先生はあきらかに、ほかの教師たちとはちがっていた。だいいち、酔っぱらっていた。そして、試験が開始されると、先生は試験用紙をとりあげて、「おお、李白だ」と大声で叫んで、問題に出ている李白の酒の詩を、中国語で朗々と、朗読しはじめたのである。それが終わると、こんどは先生は、記憶するかぎりの漢詩を、みごとな大きな声で、暗唱しはじめた。その朗誦は、少年たちのペースを攪乱した。私たちのクラスの漢詩の成績は、散々だった。しかし、私はじつに壮快な気分だった。この高校へ来てよかった、と思った。私はそのとき、三枝先生の中に、真実の大人というものを発見できたからである。

寄稿

私の映像の原点は甲府第一高等学校だ！

小林 俊一

小林俊一

昭和23年卒業
略歴・1933年、山梨県甲府市に生まれる。日本大学芸術学部からフジテレビ入社。「男はつらいよ」「白い巨塔」など約2000本の作品を製作。フジテレビ退社後、彩の会を設立し、「金曜ドラマシアター」「火曜サスペンス劇場」「土曜ワイド劇場」などを製作・演出。舞台では明治座、宝塚劇場、中日劇場など、製作・演出作品多数あり。現在、(株)彩の会代表取締役社長、社団法人日本映画テレビプロデューサー協会常務理事。

私が最後の旧制の甲府中学へ入学したのは、太平洋戦争が敗色濃い昭和20年4月だった。

4月から8月の終戦の日まで学徒動員、軍事教練、分校など、短い間に貴重な体験を得た。

終戦と同時に教科書の一部を黒く塗り民主主義の道歩く事になり、あらゆるものの価値感が変わって教育制度も6・3制に変わり、甲府中学から甲府一高になった。

デモクラシー教育の中で部活動も活発になり、私は演劇部へ入部した。

当時、講堂の横の渡り廊下の側に工作室があり、演劇部の大道具置場になってそこが部室になっていたので授業をエスケープして、チェーホフ、モリエール、シェークスピアなどを読み耽った。

それから日本大学芸術学部演劇科へ入り、学生時代は阿木翁助たちの「劇団東芸」・小幡欣治たちの「炎座」の演出部へ入った。

昭和34年フジテレビが開局、芸能部へ入社した。

配属されたのが音楽・バラエティ番組で、ザ・ピーナッツの「ザ・ヒットパレード」クレージーキャッツの「おとなの漫画」「サンデー志ん朝」を制作した。その後、ドラマ部へ移った。

或る日、渥美清が熱海の青い海を見ながら「コバちゃん、俺、若い頃、浅草のフランス座でゴロゴロしていた時、面白い奴がいっぱいいてね」と話した。渥美さんの話はとてつもなく深く、幅広く面白かった。人を笑わせるのが楽しくて仕方ないという様子がありあり分る。渥美さんはずんで、「なんか面白いことをやろうや。うんとハネたやつを」といつも2人で話していた。ここから渥美清の喜劇が始まった。

私が渥美さんに初めて提供した企画は三遊亭歌笑の一代記だった。

渥美の歌笑のその破壊的、度の強いメガネをかけて語る名調子は、本物の歌笑以上の面白さで、人気沸騰した。妻を演じた中村玉緒の可愛らしさも人気を呼んだ。『おもしろ夫婦』と言うタイトルだったが、関西ものではない。

その後は、小野田勇脚本、渥美清、広瀬みさ、黒柳徹子で『くいしんぼ』、小幡欣治、山田洋次他脚本で、棟方志功をモデルにした十朱幸代との『おかしな夫婦』など26回連続で4シリーズ制作、演出した。いずれも、正統派のコメディイとしての評価も高かった。

昭和43年の冬だった。2人でソバを食べている時、「いつか話した面白い話……そろそろやりませんか？」と水を向けると、

“日光、結構、東照宮、ケッコー毛だらけ、ネコ灰だらけ、お尻の回りはクソだらけ、タコはイボイボ、ハイ、ありがたなら蛇は二十歳で嫁に行くと来た”の啖呵が渥美さんの口から流れた。それはソバをふき出す位おかしかった。

「面白いよ」と言うと、

「そうかい、そんなに面白いかい」と嬉しそうな渥美さんの笑顔が今でも忘れられない。山田洋次と私で、何回かの打ち合わせをした中で「男はつらいよ」が出来た。

フジテレビで、昭和43年10月3日から、夜10時からの45分間、『男はつらいよ』がスタートした。

舞台は葛飾の柴又、寅さんの家族たちは妹のさくらに長山藍子、おいちゃんに森川信、おばちゃんに杉山とく子、その他秋野太作、佐藤蛾次郎、マドンナに佐藤オリエの配役だった。

初めはテキヤという商売が突飛だったのだろうか、茶の間に馴染みがなかったが、そのうちに「寅さん」は愛すべきキャラクターに。

我々人間の切実な願い、憧れ、自由など、現代の人間の失ったものがそこにあったのだろう。自分よりも人の幸福を願う寅さん。そんな寅さんに視聴者が懐かしさを感じたのかもしれない。

番組は大評判だった。

そして、山田洋次の手によって映画化されて48作、約30年も続いて日本映画界の金字塔を打ち立てたことは、今更、説明もいらないであろう。

平成8年8月4日、渥美清はその死によって自分でいつ終るかもしれない「寅さん」の幕を引いた。

昭和52年（1977年）の冬、私は田宮二郎で「白い巨塔」を制作することになった。

物語はここでは省略するとして、キャストは田宮二郎、太地喜和子、山本学、島田陽子、中村伸郎、小沢栄太郎、曾我廼家明蝶、中村玉緒、金子信雄、渡辺文雄、加藤嘉、松本典子、佐分利信など当時としては、日本を代表する俳優たちばかりだった。

賤前五郎が教授になり、そして癌で死ぬまでの彼の生き方、そして当時の医学部の裏側など、日本の医学界を、これ程強く描いた作品はない。

収録は昭和53年（1978年）春から始まり、11月15日に33回全部を撮り終わった。が、実は途中、精神的に不安定だった田宮と何回か話し合ったことがある。後で知ったことだが、田宮は強度の鬱病であった。

最後、癌で死んだ賤前が献体の為、解剖室ヘストレッチャーに寄せられてゆくシーンの時、顔は白布が掛けられるので私は代役にするつもりだったが、田宮は「私がやります！ 最後ですから」と自分でストレッチャーに乗った。私は何となく異常なものを感じた。

最終回が完成したその年も終りに近づいた12月25日、かねてから約束の田宮、太地、私の3人で食事をした。その日はクリスマスメニューでコースになっていたの、私も太地も腹いっぱいになってしまった。田宮が「もう一軒、行かない？」と言うので、太地の顔を見ると、もう駄目という顔をしたので「田宮さん、

また来年、改めてやりましょう」と言った。

帰る田宮の車を太地と2人で見送った。車が角を曲がるまで、田宮はずうっと手を振っていた。

12月28日、私は納会のコンペのゴルフ場のパーティーの席で田宮の死を知らされた。田宮の自殺の原因についてはいろいろ憶測されたが、やはり病気だったと今でも私は思っている。

田宮の死後、放送は2回残っていた。放送が終わると263本の電話が局に掛かって来た。「本物のドラマを見た」「田宮さんの最後の演技に圧倒された」「俳優の演技を超えたものだ。こわかった」「最後のシーンは涙がこぼれて」と泣き出す女性ファンが大部分で、再放送を望む電話もあった。

最終回の放送の夜は、私は1人自宅で田宮の冥福を祈りながら「大変なものをつくってしまった」と泣けてしまった。田宮二郎は短くて華やかな主人公の生を見事に演じ尽くしたのである。これはドラマというよりもドキュメントに近いものかもしれないと、数年後に私は考えたこともある。

フジテレビ在籍中、本当に沢山のドラマをプロデュース、演出させて頂いた。数だけでも1500本位はあるだろうか？ やりたいことをやらせて頂いたと思っている。どの作品もみんな心に残るものばかりだが『男はつらいよ』と『白い巨塔』は特別に心に残っている。

今は主人公の渥美清も田宮二郎も太地喜和子もこの世にいない。それを思うと感無量だ。

昭和61年フジテレビを退社して、神代辰巳、出目昌伸らと彩の会を設立した。

山田洋次、渥美清、田宮二郎たちとの出会いは、それからの生き方を変えた。21世紀に向かいBS・CSの本格的な衛星時代だ。私はこれからのドラマが、どう変わるか、見届けたいと思う。

私の今迄の人生を振り返ってみると、甲府一高の演劇部が原点だと思っている。

オウムとの闘い

井上幸彦

井上幸彦

昭和31年卒業

甲府市立東中学校から山梨県立甲府第一高等学校に進み、昭和37年3月京都大学法学部を卒業、同年4月警察庁入庁。その後警視庁第六機動隊長、同外事第二課長、在伊日本国大使館一等書記官、警視庁警備部長、千葉県警本部長、警察庁官房長、警務局長、次長等を歴任、平成6年9月警視総監就任、同8年12月退官。

私は、平成6年9月9日、第80代警視総監に就任した。首都東京の治安維持の最高責任者ということでその責任の重さに身の引き締まる思いであった。

山梨県出身者としては、初めての総監ということもあって、郷里の方々からは、期待と激励を寄せて戴き大変心強く感じたものである。

私の警視総監時代（約2年3ヵ月）を振り返ってみると、あの許すべからざる「オウム真理教犯罪者集団」との闘いの日々であったとの思いが強い。

思えば、警視庁が、宗教の仮面を被ったオウム真理教犯罪者集団に立ち向う契機となったのは、平成7年2月28日都内で発生した目黒公証役場の事務長假谷清志さん拉致事件であった。直ちに捜査を進め、この事件は、オウム真理教信者に

よる計画的犯行と断定し、犯人の逮捕と被害者の假谷さん救出のためのアクションを起すこととなった。

その日をXデーとし、準備を進めている最中の3月20日、あの忌わしい「地下鉄サリン事件」が発生した。この無辜の市民を無差別的に狙った言語道断のテロ事件は、自分達の足もとに捜査の手が及びつつあるのを察知した麻原彰晃こと松本智津夫が、警視庁が動けなくなることを企んで部下達に命じてやらせたものであった。

「地下鉄サリン事件」の発生を受けて、Xデーを先延しにし、態勢を建て直すべきでは？との考え方もあったが、私の判断は、彼らの狙いが警視庁をひるませ、ためらわせることにあるだけに、断固、それに乗せられてはならないということであった。正に警視庁がとろうとしているアクションは、侮り難い犯罪者集団との戦いであり、緒戦に遅れをとるということでは、彼らに勝ちを収めることはできないとの思いで、態勢を再チェックしながらも、予定どおりXデー＝3月22日に、警視庁の把握している彼らの拠点に一斉搜索を仕掛けたのである。当然、オウム真理教の最大拠点である山梨県所在の上九一色村の施設もその対象であった。

山梨所在の犯罪者集団の拠点に山梨出身の警視總監の総指揮のもと捜査が進められて行く訳で、私自身、不思議な因縁を感じたものである。

この一斉搜索を機に、捜査の流れと方向性が定まり、捜査のピッチも早まって行ったように思う。

そして麻原彰晃こと松本智津夫を「地下鉄サリン事件」の主謀者と断定し、平成7年5月16日、上九一色村の本拠に攻め入り、遂に彼を逮捕することができた訳である。

その後も着実に捜査を推進し、「松本サリン事件」や「坂本弁護士一家殺害事件」等々彼らの犯した残虐非道な事件を次々と解明するに至り、オウム真理教犯罪者集団に壊滅的打撃を与えることができたのである。

これは、警視總監以下警視庁44,000人の職員が文字どおり1つになって、いわば挙庁一体となって、国民の警視庁に寄せる期待と信頼に応えようと、ひたむきに努力したからである。

私は、改めて、存分に持てる力を発揮してくれた素晴らしい部下達を持てたことに感謝したい。そして一体となって恐るべき犯罪者集団と戦い、失われたと言われた首都東京の治安を回復することができたことを誇りに思うものである。

只、残念でならないのは、彼らによって拉致された假谷さんを生きたまゝ救出できなかったことである。

彼らは、拉致後假谷さんに薬物を注射するなどして死に至らしめていたことが、捜査の結果明らかになった。

思えば、假谷さん事件が契機となって、警視庁が捜査に乗り出すこととなったのであり、假谷さんが犠牲となって、わが国が破滅的狀態に至るのを防いでくれたのではないかと思う。

何故ならば、あのオウム真理教犯罪者集団は、近いうちに「ハルマゲドン」が起きるなどと唱え、サリンの大量撒布や銃器を使つてのクーデターまがいの首都混乱の事態を想定していたからである。

警視庁の立上りが、もしずっと遅れていたならばなどと考えると空恐ろしい気がするばかりである。

それにつけても、改めて、假谷さんのご冥福を祈る次第である。

「地下鉄サリン事件」の発生から早や5年余が過ぎた。

松本智津夫被告の裁判も思うように進まず歯がゆいばかりだ。5年も経つとあの時、人々が抱いた言い知れぬ恐怖感と不安感は、どこかに飛んで行ってしまったようだ。

しかしあの事件を決して風化させてはならないのだ。2度とあのような犯罪者集団を出現させないためにも。

警視総監でピリオドを打った私の警察官人生を振り返ってみると、若い時分からそれぞれのポストで、よくもまあいろいろな事件、事象に恵まれたものだなとの思いが強い。

とりわけ、若い隊員達と汗を流した警視庁第六機動隊長時代（昭和47・5～48・8）、いわゆる「金大中氏拉致事件」を担当した同外事第二課長時代（昭和48・8～49・8）、昭和天皇崩御に伴う「大喪の礼」警備を担当した同警備部長時代（昭和63・2～平成元6）等々が懐かしく思い出される。

いつの頃からか私は、甲府一高校是である「苟も日に新たなり、日々に新たに、又日に新たなり」を強く意識しながら仕事を進めるようになった。常に清新な気持で、今日もよしやるぞという思いで事に臨むことによって道が拓けて来たように思う。又、いつもポストに見合う責任の重さを深く認識し、決して「逃げ」の姿勢をとらずに事にあたって来たことが相応の結果に結びついたように思う。

同時に、いつもいい人々に恵まれ、自分の思うような組織運営もできたように思う。

正に悔いなき警察官人生だったとしみじみ感じている。

退官して歳六十路を越えた今、郷里への思いは、段々と強くなるようだ。同級生、同窓生等との語らいが楽しみな今日この頃である。

声楽家としての半生

平 野 忠 彦

現在、東京芸術大学音楽学部教授として、オペラを中心に指導すると共に、オペラ団体、二期会に於いて新国立劇場を中心としてオペラ活動をしている。又、自分自身のライフ・ワークの一つとして、ミュージカルにも挑戦し、「ジーザス・クライス・スーパースター」「ラ・マンチャの男」「アニー」等の主役を演じている。

昨年から今年にかけて、「天主物語」「罪と罰」を新国立劇場で、又、オペレッタ「こうもり」「ルクセンブルグ伯爵」等を演じ、2000年は、青山劇場で「アニー」オペレッタ協会で「メリーウィドウ」（10月）新国立劇場で「青ひげ公」（11月）

平野忠彦

昭和31年卒業
昭和13年3月、甲府市に生まれる。
東京芸術大学卒業。畑中良輔氏に師事。東京芸大専攻科在学中に「フィガロの結婚」のフィガロ役でオペラ・デビュー。昭和48年、文化庁在外派遣研修員として渡欧。昭和51年、ウィンナーワールドオペラ大賞受賞。現在、東京芸術大学教授、神戸山手短期大学特別教授、二期会理事など。

と続いている。

そもそも、甲府一高の3年の時、奨来の声楽家を夢見て、東京にレッスンに通い、東京芸術大学に入学、晴れて声楽科の学生となった。受験当初は、山梨大学の小池寿郷先生のもとで学び、以後、畑中良輔（芸大名誉教授）先生の教授を受け、現在に至っている。声楽家になれる資質とか、才能なんてものは、自分ではさっぱり分らずに、回りの人達にすすめられて、その気になってしまったのである。

当時、オペラは未だ、今程、活発ではなく、オペラ歌手になる人も少なかった。

芸大を卒業して、コンクールを受けたり、オペラ団体の二期会の会員になったり、NHKのオーディションを受け、又開局当時の12チャンネルのミュージカルをやったり等、何でもやった。そして自分自身オペラだけでなく、テレビで顔を売るのが一番出世の早道と思い、「題名のない音楽会」（最初は12チャンネルだった）「音楽のおくりもの」「音楽の広場」（NHK）に出演した。そして、その他の分野として、アニメ番組「ジャングル大帝」の主題歌を歌い、コマーシャル、「ピオタミンゴールド」のヒットで有名になってしまった。但し、これ等はあくまでもサイド・ビジネスであった。

本業は、ドイツオペラ、主に、モーツァルト作曲の「フィガロの結婚」であるとか、ワーグナー作曲の「タンホイザー」等を歌って来た。そして、山梨県民文化ホールの設立記念公演で、プッチーニ作曲の「蝶々夫人」を歌ったのである。その時の蝶々夫人は2学年後輩のプリマドンナ、林ひろみさんであった。又県主催のオペラ、「椿姫」を佐藤しのぶさんと歌ったりもした。

何にしても、声楽と云う分野は、オペラあり、オペレッタあり、歌曲あり、ミュージカルありと非常に広く、時には「愛を語り」「死を想い」そして、「自然を歌う」。自分の中にはぐくまれた、知識とか自然とか、全ての出発点が若き小生の甲府に於いて培われて来たもの、それは、富士山であり甲斐駒ヶ岳であり、昇仙峡であった。そして、あの伝統と誇りを持った甲府一高の校舎であり、武田神社であり舞鶴城である。何とも甲府に生れ、甲府で育った小生にとって、その青春の1ページは、限りなく大きなものであり、自分の血であり肉である。甲府一高の120年の歴史は、とうてい、一口で語れるものではないであろうけれど、その中で育ったものの1人である誇りは計り知れない大きなものであり、現在の自分の中で支配する何かが心や身体の中を蠢めいている。それらの力は、まだまだ成長していくであろうし、そして、甲府一高で3年間学んだことの喜びとなり、「質実剛健」の魂はいやがうえにも頭上で輝いている。芸術を志し、一流を夢見、現在の時点で、本当に声楽家になって良かったと云う想いが、ある種の満足感として五体を駆けている。芸大受験を勧めてくれた近藤、浅川両先輩、そして同輩、そして後輩、そして先生方に感謝をしている。

甲府一高と私の人間形成

内 藤 悦 次

内藤悦次

昭和33年卒業
昭和14年9月甲府市に生まれる。
琢美小、付属中、甲府一高卒業、
慶応大学卒業後、大成建設を経て
昭和41年から山梨在住。
現在内藤家具インテリア工業社
社長、山梨県家具工業協同組合理事
長、全国家具工業連合会副会長、
山梨県中小企業団体中央会副会
長、甲府商工会議所、国際交流委
員長、山梨県政功績者、藍綬褒章
受賞者

母校甲府一高が創立されて120年、卒業生の1人として、これ以上の誇りはありません。同時に、世紀を超えて、この輝かしい伝統と校風を築いてこられた歴代校長先生を始め関係者各位に心から敬意を表する次第であります。

私が母校を卒業したのは既に40有余年前。実際に、記憶は遙か遠い彼方にあります。その間、同窓会や親しい友達と小グループの集まりに参加したことはありましたが、母校の名前を念頭において何かしたり、お役に立ったことが、いったいどのくらいあったらうか、お恥ずかしい限りです。その後の高等学校の選択も、教育改革の中で総合選抜制度となり、私達の頃のように進学校は国中地区では甲府一高だけの時代と違って、甲府南、西、東、昭和、それに私立の駿台、山梨学院等と様々となっています。残念なことに私の2人の息子も父の母校に行けませんでした。そんな中で私の母校に対する懐かしさや母校愛も薄れてしまいがちとなり申し訳なく思っています。

さて、私の一高時代を振り返ってみますと、今と違って、勉強もスポーツもみんな一生懸命でした。質実剛健、文武両道が校是で、勉強のできる生徒も多かったが、2年生くらいまではむしろ体育会系に一生懸命で、詰め襟の黒い学生服に高下駄のような格好をして、女生徒には目もくれずにパンカラを粋がっていた古き良き時代でした。いま、17歳の少年非行が問題となっていますが、あの頃は、戦後社会を一生懸命生きている親の背中を見て育ったので、社会に反抗するなどといった余裕はなく、世の中に役立つ人間になりたい、さもなければ不安で生きていけませんでした。それが我々の根底に流れていた一般的な風潮ではなかったのではないのでしょうか。

Boys be ambitious (少年よ大志を抱け!!) という言葉を始めて耳にしたのは甲府一高に入学した時でした。確か、校長室にこの言葉の額が掲げてあったのか、或いは、校庭にクラーク先生の胸像が立ててあったのか記憶は定かではないし、甲府一高とクラーク先生の札幌農学校とどのような関係にあったのか今もってよく解りませんが、甲府一高の卒業生は少なからず、皆この言葉の薫陶を受けている筈です。後で解ったことですが、実際はこの言葉の後に And it must be first class (しかも、それは一流でなくてはならない) というフレーズで完結するのだそうです。大志も大志、一流の大志でなければ意味がないというわけです。私が大学4年の時、慶応大学とアメリカ、Wミシガン大学の交流で、同大学のサマースクールに参加したことがありました。まだ日本人の海外渡航が自由化される前で、為替も1ドル360円の固定相場制の時代でしたので何かと外貨には不自由でした。そこで、父の紹介で清里キープ協会のポールラッシュ博士に外貨のご支援をお願いすることにしました。博士は快く私の願いを聞き入れ、私の手を取り、じっと目を見詰めながら語り始めたのがこの言葉です。“Boys be ambitious, and it must be first class 内藤よ、今のアメリカを大学生の目で隅々まで見て、

十分に見分を広めてきなさい。外貨はシカゴのキープ本部から日本の外貨制度の枠の外で幾らでも用意してあげるから”。この言葉は多感な学生の私を舞い上がらせるには十分すぎるものでありました。戦後荒廃した日本人の心に生きる勇気を与える為、自ら鋤を取り、荒れ地を耕し、酪農を教え現在の清里を作り上げた神様のような人の言葉でしたから尚更です。私が久し振りに母校甲府一高を意識したのもその時でした。そして、この時から、仕事にも、ボランティアにも、政治にも絶えず海外に目を向ける私ができあがったものと思っています。

私の事業は、住宅関連商品、特にシステムキッチンや下駄箱、収納家具等といった内装品家具の製造販売です。大学卒業後、一時、海外駐在の商社か、戦後賠償で海外の建設復興事業に取り組んでいた建設会社に就職して外国生活をと思い、縁あって大成建設に勤めていましたが、ある事情で家業の家具製造業を手伝うことになりました。知らない人も多いでしょうが、山梨における家具産業も地場産業の1つとして、少なくとも今までは、地域社会の発展に寄与してきた筈です。働き盛りの若い頃は同業者を募って甲西工業団地の一角に家具団地も造りました。又業界のことだけでなく、中小企業団体中央会や甲府商工会議所の代表として地域産業支援のため山梨県や甲府市等の行政当局或いは政府与党に陳情することも多々ありました。そして、これらの仕事を通して多くの同窓の先輩や後輩に巡り合いましたが、その目的を有利に展開できたのも、120年の歴史と伝統の下で学び、目に見えない絆で結ばれた一高同窓生としての同士の結合が要素として働いているものと硬く信じて疑わない次第であります。

交友関係では私の友人の1人に望月操三君（現在セコム山梨社長）がいます。彼とは不思議な縁で、幼稚園から大学まで小学校時代を除いてずっと一緒でした。いわば刎頸の友の関係です。しかし何といても甲府一高時代のライバル関係がその後、県内の経済界で活動する2人のエネルギーになっていると思っています。彼が活躍するから俺もというやつでしょう。今、彼とは甲府商工会議所、国際交流委員会の正副委員長として、又甲府ロータリークラブでも共に会長を経験しながら楽しくやっています。

忘れてならないのは恩師内田松樹先生（白根高校長をもって退官、現同町教育長）との関係です。地元在住ということで望月君と2人で幹事をやっていますが、先生を囲んでのクラス会（小カニ会）はいつも開催が待遠しく、各分野で活躍されている白髪混じりの旧友と肩を抱き合って互いの健康を喜ぶ光景は一高ならではのものではないでしょうか。又、先日、内田先生の喜寿を祝う会を開催しましたが、いつ見ても若々しい先生の姿は実にうれしいものであります。

最近、私は甲府商工会議所の仲立ちで中国の四川省に家具の工場を建設しました。中国へ行ったことのある人はわかると思いますが、改革開放からまだ20年、四川省のような内陸部の人々の住生活は大変遅れています。日本の技術と経営手法で中国人民に快適な居住空間を提供したいと考えてのことではありますが、おそらくこの決断は、学生時代から我が母校甲府一高の、そしてクラーク先生の“Boys be ambitious!”という言葉に影響されていることだけは間違いなさそうです。私の人間形成の出発点は甲府一高に学んだことに始まっていることは確かです。

五味文彦

昭和39年卒業
昭和21年山梨県に生まれる。東京大学文学部国史学科卒業。日本中世史専攻。著書に「院政期社会の研究」「吾妻鏡の方法」「平清盛」など。お茶の水女子大学助教授、東京大学助教授を経て、現在、東京大学大学院人文社会系研究科教授。

変化のゆくさき

五味 文彦

私が高校を卒業する頃は高度成長の真っ直中にあった。やがて東京オリンピックが開かれるなど、好景気に沸いていたが、高校卒業から4年後の1968年、私が大学を卒業する頃に起きたのが大学紛争である。

ここには大学を始めとする制度への問い掛けがあった。日本の社会が高度成長を達成して、大きく変貌するなかでの新たな動きであったように思う。

それから石油ショックや公害問題を経て、さらにバブル景気を経るなかで、この制度への問いは今日まで基底にある。私が勤めている大学でも、法人化の問題となって重くのしかかっている。

私は日本の歴史を専門としているので、つついこうした今の時代が歴史的に見て、どうなのかと考えてしまうが、一口でいえば、次のように指摘できよう。

1868年の明治維新に始まる近代国家（国民国家）形成の流れが、帝国憲法や新憲法の制定などの制度化の100年を経て、ひとまず高度成長の時期に到達点を迎え、その近代国家という制度が揺らいでいる時期に今は相当するのであると。

さらにこうした動きがいつまで続くのか、そしていつに収束してゆくのかを考えてみると、日本の歴史がほぼ100年ごとに大きな転機を経験してきたところから考えるならば（この点は岩波ジュニア新書『武士の時代』に記した）、2068年頃になるのではないかという予想がつくのであるが、果たしてどうであろうか。またその時に社会はどう変貌しているのでしょうか。

残念ながら、この予想の結末を私が見ることはできそうもない。今の高校生ならば、時代の変化を担いながら、変化の行く先を見届けることができるであろう。しかし逆に私自身は、明治国家を造ってきた人々の見ることのできなかつた近代国家の100年の変化の行く先を見届けてきたことになる。

創立120年という年月の重みを思いつつ、新たな歩みを求めてゆく母校のこれからの発展を祈念してやまない。

私の競技生活

恒 吉 恵 子

恒吉恵子

平成元年卒業
昭和45年6月12日生
昭和61年全国高校選手権優勝
昭和64年ソウルオリンピック出場
平成2年北京アジア大会出場
平成4年バルセロナオリンピック出場
平成6年世界選手権大会出場
現在埼玉県川口市在住2児の母

私がアーチェリー競技を始めたのは、中学1年の夏でした。始めたきっかけは、姉がすでにやっていたことと、かいじ国体のアーチェリー競技が私の住んでいた敷島町で開催されるからでした。中学生の頃は出場できる試合も少なく、ただ練習するだけの毎日でした。そのせいか、なかなかアーチェリーが楽しいとは思えず、いつ辞めてもいいなと考えていました。しかし、県内で唯一の強化指定校である甲府一高に進学し、恩師である吉成謙先生に指導をしてもらうようになって

から、アーチェリーに対する気持ちが変わっていきました。県内での競技人口が少ないこともあり、高校に入学してすぐに関東大会や社会人の大会にも出場することができ、だんだんとアーチェリーの魅力に引き込まれていったのです。

最初はただ試合に出場できることが楽しく、恐いもの知らずな強気の性格がいい結果につながり、1年生の時に関東大会やインターハイで優勝することができました。その後は勝ちたいという欲も出て、秋に行われたかいじ国体に向けて何時間も練習する毎日でした。国体の結果は姉が優勝し、私は3位でした。姉に負けたことの悔しさが、今思うと私がオリンピックに出場できるようになる程、真剣にアーチェリーに取り組むようになったきっかけだったかもしれません。しかし、常に勝ち続けることは難しく、自分の中での感覚と競技成績がかみ合わず、勝てない時期もありましたが、ちょうどその頃に足を骨折し、1ヶ月以上アーチェリーから離れることで気分転換にもなり、私の中でアーチェリーをやりたいという気持ちが強く、モヤモヤしていたものが吹き飛んだような感じでした。この競技は誰かと戦うのではなくて、いかに自分自身との戦いに勝てるかということが勝敗を大きく左右するのですが、そのことを強く実感したのが高校3年の時のソウルオリンピックでした。

オリンピックの選考会に出場した時は、代表はまず無理だろうと思っていたので、ジュニアのアメリカ遠征を目標にしていたのですが、大荒れの天候となり、私の運が強かったのか、まさかのオリンピック代表選手になっていました。アーチェリー競技としても、山梨県としても、初の高校生代表ということで周囲の盛り上がりは大きく、とまどうことが多くありました。自分ではオリンピックに向けて精一杯練習しましたが、試合では緊張のあまり体調を崩してしまい、周りとのコミュニケーションが取れず、最悪のコンディションで試合に臨みました。練習の成果を何ひとつ出せず最悪の結果となり、しかもその大会の優勝者は私と同じ年の韓国の選手ということもあって、悔しさと惨めさでいっぱいでした。自分の考えの甘さと、世界という舞台の怖さとレベルの差を実感してみて、このままでは終わりたいくないという気持ちが強くなり、次のオリンピックに出場することを目標に頑張ることを決意しました。

次のオリンピックに向けて自分が何をしなければいけないかを考え、4年間アーチェリーに熱中できる大学を選ぶことにし、恩師の母校でもある日本体育大学に進学しました。大学は上下関係に厳しく、つらいことも沢山ありましたが、そのおかげで精神的な強さも身につけることができたのではないかと思います。練習でも高校時代は毎日、先生が指導してくれていたもので、何もかも1人でやらなければいけない状況になって、初めて恩師のありがたみを感じました。人に頼ってばかりいた生活から自立して、冷静に自分の事を分析し、自分に何が必要なのかを考え、集中して練習をすることが出来るようになりました。成績も高校時代には越えられなかった点数の壁を越えられるようになり、バルセロナオリンピックの選考会にも、自信を持って臨むことができました。そして目標としたオリンピックに、女子でトップの成績で通過することができました。

2度目のオリンピックということと、それまでにアジア大会などの試合を経験してきたこともあり、だいぶラックスしていたつもりでしたが、やはりオリン

ピックという雰囲気が必要以上に敏感になっていました。結局満足のいく結果は出せず、世界の強さと自分自身の限界を痛感しました。しかし4年前とは違い、オリンピックを目指して自分なりに取り組むことができたので、負けた悔しさはありましたが、やるだけのことはできたという爽快感もありました。

大学卒業後は教員として、母校である甲府一高で4年間でしたが指導する立場になり、改めて選手を育てることの難しさを学びました。私が選手として自分のやりたい事を実行できたのは、その環境を与えてくれた家族や恩師や仲間など、お世話になった方々のおかげだと、本当に感謝しています。14年間の競技生活の中で、何事もあきらめず、前向きに考えて取り組むことを学び、様々な経験を通じて得られたものは、時が経った今、その大きさを実感しています。現在はアーチェリーから離れ、自分の家庭を持ちましたが、将来自分の子供にもスポーツに関わり、多くの経験をしてくれたらいいなと思っています。また私自身も機会があれば、今度はのんびりとスポーツを楽しみたいと考えています。

最後に、私の高校時代とは違い、勉強と部活の両立は大変かもしれませんが、今だから出来ること、今しか出来ない事を精一杯頑張っただけで欲しいと思います。目標を持たなければ、努力することは出来ません。私はスポーツという分野で目標を持ってやってきましたが、たとえそれがどんな事でも、努力した事は必ず自分にとってプラスになるはずです。これから先に多くの可能性を秘めている高校時代を無駄にはしないためにも、何か夢中になれるものを見つけて欲しいと思います。何事もあきらめず前向きに考えて、卒業後、何年か経って振り返って見た時に、充実していたと思えるような有意義な高校生活を送って下さい。

山 梨 県 立 甲 府 中 学 校 ・ 略 年 表
山梨県立甲府第一高等学校

年 号	略 歴	事 項	備 考
明治13	1880	9・13 山梨県中学校規則制定、入学志願者募集 10・23 山梨県師範学校内に中学校を併設 開校の式典挙 行この日を本校創立記念日とする	M12 教育令公布
14	1881	8・19 師範学校を山梨学校と改称	
15	1882	10・9 山梨学校を徽典館と改称	
17	1884	4・8 吉田義静館長に発令（初代校長）	
20	1887	3・22 徽典館中学科を山梨県尋常中学校と改称 7・13 平井正、2代校長に発令	19 中学校令制定
21	1888	1・7 甲府市錦町に移転	
23	1890	4 尋常中学校第1回卒業式 6・30 長倉雄平、第3代校長に就任 10・11 村上孚光、第4代校長に就任	23 「教育に関する勅語」発布
26	1993	3・30 黒川雲登、第5代校長に任命	27 日清戦争開戦
28	1895	4・20 山梨県尋常中学校規則制定	
30	1897	5 修学旅行（関西方面） 8 臨時県議会で尋常中学校の定員を500名に増員 建築費38,388円を可決	
31	1898	10・15 秋季大運動会（第1回）実施 以後毎年実施 5・17 春季大運動会（第2回）実施 以後毎年実施 5・24 弊原坦、第6代校長に任命	
32	1899	1・9 同窓会会則成る 3 臨時県議会で中学校敷地を舞鶴城跡に決定 4 中学校令改正に伴い、山梨県中学校と改称 5 舞鶴城跡に校舎起工	32 中学校令改正公布
33	1900	4・25 甲府市錦町より舞鶴城跡の新校舎に移転 落成を兼ね開校式を挙行 4・29 本校の分校として山梨県都留分校設置を告示	
34	1901	3・26 大島正健、第7代校長に就任 4・1 山梨県第一中学校と改称	
35	1902	6・15 都留分校を大月に移転する旨の告示	
36	1903	4 都留分校を県立第二中学校都留分校とする	
39	1906	6・1 山梨県立甲府中学校と改称 9・17 校旗制定の式挙行	37 日露戦争開戦
40	1907	11・6 修学旅行 4・5年生日光・中宮寺・足尾から諏訪 10・5 野球・庭球・撃剣の三部諏訪中学校へ遠征 10・30 教育勅語奉読式	41 戊申詔書発布
43	1910	10・23 創立30周年記念式典挙行	
44	1911	1・7 同窓会創立協議会開催 4・9 同窓会総会開催	45 明治天皇没
大正1	1912	8・3 先帝陛下哀悼式挙行 10・12 修学旅行 4・5年生京都方面へ	
2	1913	6・3 川村麟也（明30卒）医学博士の学位を受ける 本 校卒業生で最初の博士	
3	1914	9・7 末久喜十郎 第8代校長に就任	T3 第一次世界大戦始まる
4	1915	11・10 御大典奉祝式 御大典記念中等学校連合大運動会	
7	1918	7・14 田村喜作 第9代校長に就任	
9	1920	10・23 創立40周年記念式典、祝賀会開催	
12	1923	6・27 江口俊博 第10代校長に就任 9・20 生徒定員を1000名とする	
13	1924	11・4 第1回強行遠足 第1班 東京方面 第2班 穴山新府城跡 第3班 昇仙峡	

年 号	略 歴	事 項	備 考
大正14	1925	11・4 第2回強行遠足 松本方面	15 大正天皇没
15	1926	6・6 庭球部 全国中等学校庭球大会で優勝	
昭和元		11 野外演習 1～4年生	
		12 軍隊宿泊始まる 5年生	
2	1927	1・14 学校軍事教練の査閲	
		2・7 御大葬遥拝式挙行	
		10・15 剣道部 全国中学校剣道大会で優勝	
3	1928	2・20 校歌制定（三井甲之作詞・東京音楽学院作曲）	
		9・1 西山梨郡千塚村（現在地）の新校舎で初授業	
4	1929	10・22 校舎落成式挙行	
		23 創立50周年記念式挙行	
		24 創立50周年記念大運動会	
		創立50周年記念絵画大展覧会	
		同窓会校舎前の庭園を寄贈	
6	1931	4・17 御真影奉迎	S6 満州事変勃発
7	1932	3・10 陸軍記念日 全校生徒演習参加	12 日中戦争開始 13 国家総動員法公布 16 太平洋戦争開始 17 学徒動員令発令
		3・31 隈部以忠 第11代校長に就任	
8	1933	7・1 応援歌（篠原作詞・小池作曲）発表	
10	1935	8・13 野球部第21回全国中等学校野球大会（甲子園）に初出場	
12	1937	9・31 大野芳麿 第12代校長に就任	
13	1938	この頃から野外教練・勤労奉仕等盛ん	
15	1940	10・23 創立60周年記念式典挙行	
16	1941	4・1 甲府中学校報国団結成（校友会を改称）	
		10・16 報国隊結成式挙行	
		軍事教練・勤労奉仕・防空訓練・軍慰問等盛ん	
18	1943	10 この頃より援農のため勤労働員多し	
19	1944	4・17 決戦非常措置要項に基づく学徒勤労働員に関する訓令 農家・飛行場整備・軍需工場等への動員多し	
		6・16 永井徳潤 第13代校長として着任	
		11・4 第21回強行遠足 1・2年生のみを対象	
20	1945	3 陸軍大学本館の1・2階西半分に疎開 第56回卒業式 5年生動員先の相模原の陸軍造兵廠で実施 第57回卒業式 4年生繰上卒業横須賀の海軍航空技術廠で実施	20 国民学校初等科を除き学校における授業は停止
		7・6 甲府空襲 小講堂・特別教室・新館等焼失	ポツダム宣言受諾・敗戦 占領開始 21 新憲法公布 22 教育基本法公布
		9・27 午前・午後に分け二部授業開始	
		10・30 同盟休校で授業停止	
		11・3 本年度の強行遠足中止	
21	1946	2・12 生徒自治会委員選挙	
		4・1 近藤兵庫 第14代校長に就任	
		8・1 本日より旧教科書使用禁止	
		10・29 第22回強行遠足実施	
		11・3 明治節記念式・新憲法公布記念式	
22	1947	4・1 新学制施行により山梨県立甲府中学校併設中学校開設	
		4・8 始業式 学制改革のため1年生募集停止	
		4・15 校友会規約改正審議	
		5・3 憲法施行記念式挙行	
		9・19 新制高校実施準備委員会選挙	
		9・23 校歌信条改正委員会発足	
23	1948	2・24 校章決定	
		3・1 甲府中学第60回卒業式（旧制中学最後の卒業式）	

年 号	略 歴	事 項	備 考
昭和23	1948	4・1 学制改革により山梨県立甲府第一高等学校と改称 全日制課程・定時制課程・通信制課程及び併設中 学校併置 4・23 P T A総会 5・20 甲府一高新聞第1号発行 10・22 新校歌発表会 文化祭開催 23 創立記念式典・校舎落成記念音楽会	
24	1949	3・2 第1回卒業証書授与式 3・31 併設中学校廃止 6・4 第1回高校総合体育大会男子総合優勝 以後第3回まで優勝	
25	1950	4 本年度より男女共学となる 5・20 篠原寛二 第15代校長として着任 10・21 創立70周年記念行事開始（～29） 23 創立70周年記念式典 11・1 第26回強行遠足 女子生徒初参加穴山まで 11・13 修学旅行再開（2年生）奈良・京都方面	
27	1952	3・1 全日制第4回 定時制第1回卒業証書授与式	26 サンフランシスコ講和条約締結
28	1953	音楽館完成	
29	1954	3・14 新入生学力検査 18 新入生合格者発表（500名） この年東京大学合格者18名 4・1 雨宮重治 第16代校長として着任 8・2 文部省高等学校入学者選抜方法を中学校の必修教 科及び選択教科の全部とする	27 講和発効
30	1955	2・23 体育館落成式 10・25 強行遠足 翌26降雨のため途中中止	
31	1956	12・23 本校卒業生石橋湛山 内閣総理大臣に任命される	
32	1957	4・1 斉藤俊章 第17代校長として着任 10・23 図書館・特別教室落成	
33	1958	3・1 全日制第10回 定時制第7回 通信制第1回 卒業証書授与式	
34	1959	8・13 台風のため県下の被害甚大 18 生徒勤労作業出動（～22） 9・30 強行遠足 伊勢湾台風による道路欠損箇所多く中 止と決定	35 安保改定問題 高校生の参加に対し文 部省より指導確立の通達
35	1960	10・23 創立80周年記念式 24 80周年記念講演 25 80周年記念文化祭 この頃から学力テスト・模擬試験など盛んに	
36	1961	3・24 日新ホール落成式 4・1 広瀬勝雄 第18代校長として着任 8・14 野球部 全国高校野球選手権大会に出場 10・26 生徒会歌 賛歌発表会	
37	1962	10・15 第37回強行遠足 佐久方面にコース変更	39 東京オリンピック開催
38	1963	9・28 強行遠足の歌発表	
39	1964	10・19 オリンピック観覧のため休業（～20）	
41	1966	4・1 高遠啓一 第19代校長として着任 7・25 集中豪雨による被害者宅に救援作業	
43	1968	3・11 高校入学生学力検査この年より甲府南高校との総合選抜制度始まる 4・2 入学式 甲府南高校との総合選抜による最初の入学生 8・10 野球部 第50回全国高校野球大会に出場	43 全国的に大学紛争広がる

年 号	略 歴	事 項	備 考
昭和44	1969	4・1 根津修蔵 第20代校長として着任 この年から翌年にかけて高校生の学生運動参加盛ん	46 沖縄返還協定調印 ドル・ショック
45	1970	10・20 創立90周年記念式典	
46	1971	10・13 第46回強行遠足 降雨のため途中中止 定時制は最後の参加	
		10・22 一高祭（文化祭改称）～24	
47	1972	4 定時制・通信制はこの年中央高校へ吸収される	
		5・17 新校舎北館落成式	
49	1974	3・1 全日制第26回定時制第23回通信制第17回卒業証書授与式 定時制・通信制課程はこれをもって廃止（中央高校へ）	
		4・1 若林勇 第21代校長として着任	
50	1975	4 4本年度より総合選抜に甲府西高校が加わり3校総合選抜となる	
51	1976	4・1 山下穆 第22代校長として着任	
52	1977	4 本年度より総合選抜に甲府東高校が加わり4校総合選抜となる	
54	1979	2・24 甲府中学校第56回思い出卒業式	
55	1980	4・1 岩波政雄 第23代校長として着任	
		10・21 創立百周年記念美術展（～23）	
		10・22 創立百周年記念式 記念音楽会	
56	1981	5・23 百周年記念館竣工式	
58	1983	4・1 山村鉄夫 第24代校長として着任	
59	1984	4 本年度より甲府地区総合選抜に甲府昭和高校が加わり5校総合選抜が実施される	
60	1985	10・16 強行遠足記念像除幕式	
		11・22 文部省研究指定校公開研究発表会	
61	1986	2・19 校歌碑除幕式	
		4・1 望月政廣 第25代校長として着任	
		10・12 かいじ国体秋季大会開会式集団演技・式典音楽に参加	
63	1988	7 3年生中込恵子 アーチェリーでソウルオリンピックに出場	
平成元	1989	4・1 三沢弘毅 第26代校長として着任	
		5・8 朱光館開館式	
2	1990	10・31 創立110周年記念式典	
3	1991	4・1 広瀬重雄 第27代校長として着任	
		4・8 入学式 本年度より英語科設置（45名入学）	
		7・16 校舎改築準備委員会開催	
4	1992	3・16 中国研修旅行団出発（～21）	
		3 アメリカ短期留学始まる	
		8・27 校舎解体神事 校舎に感謝する会	
		9・15 校舎解体工事始まる	
		10・13 第66回強行遠足 北見北斗高校生参加	
		10・22 新校舎起工式	
5	1993	4・1 伊藤嘉雄 第28代校長として着任	
		10・28 新校舎への移転作業始まる	
		11・17 校舎竣工記念式典挙行	
6	1994	4・12 フーバー高校生来校（～14）	
		9・27 石橋満山胸像除幕式	
7	1995	4・1 関口稔夫 第29代校長として着任	
8	1996	8 全国総合体育大会山梨県大会開催 公開演技等に出場	
9	1997	4・1 雨宮惇 第30代校長として着任	
10	1998	1・26 推薦入試面接 この年から高校推薦入試始まる	
11	1999	4・1 興石順一 第31代校長として着任	
		12・4 四川省教育友好使節団来校	
12	2000	10・19 創立百二十周年記念甲一美術展開催（～23）	
		10・20 創立百二十周年記念式典挙行 甲一音楽会開催	

歴代同窓会長

初代	山本保	10代	寺田七男
2代	松谷緑郎	11代	矢崎茂三郎
3代	深沢議一	12代	清水八束
4代	深沢平重	13代	高遠啓一
5代	島田盛平	14代	飯島哲
6代	飯島豊甫	15代	相川義仁
7代	新海栄治	16代	太田源一郎
8代	芦沢留次郎	17代	海沼昭
9代	小野熊平	18代	井上雅雄(現会長)

歴代PTA会長

昭和23年度	寺田七男	昭和50年度	海沼昭
昭和24年度	寺田七男	昭和51年度	上原美好
昭和25年度	寺田七男	昭和52年度	大塚篤郎
昭和26年度	露木寛	昭和53年度	遠藤周次
昭和27年度	名取忠彦	昭和54年度	笠井忠文
昭和28年度	名取忠彦	昭和55年度	広瀬昇
昭和29年度	平井一満	昭和56年度	橘田正彦
昭和30年度	許山整	昭和57年度	山本栄彦
昭和31年度	大石利雄	昭和58年度	渡辺守人
昭和32年度	米沢良知	昭和59年度	小川貢夫
昭和33年度	小野熊平	昭和60年度	保坂哲郎
昭和34年度	篠原良雄	昭和61年度	入倉吟二
昭和35年度	高野孫左衛門	昭和62年度	望月政男
昭和36年度	小田切彰	昭和63年度	岡島泰三
昭和37年度	許山整	平成1年度	高野洋志雄
昭和38年度	鷹野慶次郎	平成2年度	小澤照洋
昭和39年度	佐々木秀春	平成3年度	古屋力
昭和40年度	飯島哲	平成4年度	中村信雄
昭和41年度	小野熊平	平成5年度	田中正喜
昭和42年度	佐藤森蔵	平成6年度	小林聰一郎
昭和43年度	原忠三	平成7年度	酒井昌男
昭和44年度	篠原方泰	平成8年度	遠藤順彦
昭和45年度	矢崎実	平成9年度	興水孝樹
昭和46年度	小田切順三	平成10年度	土橋博司
昭和47年度	石原博雄	平成11年度	原経光
昭和48年度	相川義仁	平成12年度	功刀利一
昭和49年度	加賀美一三男		

あとがき

本誌は甲府第一高等学校が平成12年、西暦2000年に創立120周年を迎えた記念事業の一環として編集された。本校には創立100周年に際し多大な時間と苦勞を傾けて編纂された『百年誌』がある。本誌の性格をこの『百年誌』との関係からどのようにするか幾分の議論があったが、結論として『百年誌』に扱われた時期の歴史については主としてここから借り、その後の20年間については主な出来事を拾い上げて、資料として残すこととした。1年という編集期間の制約、また近年の出来事を歴史的に叙述することの困難さなどがその理由であった。本誌がこの種の記念誌としてやや曖昧な性格をもつとすれば、こうした経過からである。そのほか本校に関する様々な事柄の考察や、同窓生からの寄稿、回想等を掲載させていただき本誌に花を添えていただいた。

校務とともに本誌を作る仕事には様々な難しさがあつた。しかし、内容に不満を感じながらも約束の期限を1月ほど遅れただけでなんとか発行に至ったことを喜ぶたい。さらに本誌が読まれ、本校の未来を展望する一助となれば望外の幸せである。

本誌の編集にあたり執筆の勞を取られた方々、寄稿の依頼に快く応じていただいた同窓生諸兄、文章の転載を許していただいた方々、その他御多忙のなかで御協力いただいた多くの方々に心から感謝したい。また編集、印刷に献身的なご足勞をいただいたアド井上社の飯野氏にもこの場を借りて謝意を表したい。

(斉藤正敏)

編集委員

井上 雅雄	依田 秀夫	小沢 登	望月 政廣	高室陽二郎
渡邊 守人	遠藤 和夫	須藤 信自	大芝 孝二	桐山 秀人
斉藤 正敏	福岡 哲司	新津 元		

執筆者 (第1・2部)

依田 道彦	大西 勉	斉藤 正敏	高瀬 孝人	福岡 哲司
三井 誠	保坂 博文	藤巻 敬正		

表紙デザイン

須藤 襄

山梨県立甲府中学校 山梨県立甲府第一高等学校

創立百二十周年記念誌

発行日 平成13年5月1日

発行 甲府中学・甲府一高
創立120周年記念事業協賛会

〒400-0007

山梨県甲府市美咲二丁目13-44

山梨県立甲府第一高等学校内同窓会事務局

電話 055-253-3525

編集 創立百二十周年記念誌編集委員会

印刷 株式会社アド井上

